公益財団法人 福武財団

# 地域振興助成
# 2023年度アートによる地域振興助成
# 成果報告書

Fukutake Foundation

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 山津波――山と海の被災地の現在を巡るアートツーリズム | | | | |
| 団体名 | 小森はるか＋瀬尾夏美 | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月28日 | | |
| 代表者名 | 瀬尾 夏美 | 活動地域（都道府県名） | 宮城県 | 詳細エリア | 伊具郡丸森町／岩手県陸前高田市 |

北上川のヨシ原の現地視察とレクチャー

東日本大震災津波伝承館の視察と現地の方のレクチャー

丸森町の住民による現地でのレクチャー

## 活動の目的

東日本大震災の被災地域には、現状たくさんの伝承施設があるが、設置市町村の情報のみに特化しており、全体を俯瞰することは難しい。また地域の人と出会う機会も少ないため、せっかく遠方から訪問しても関わりしろを見出しにくい。本プロジェクトはアートを入り口にすることで、知識・体験の差や立場に依らない語らいの機会を増やしながら、出来事への直感的かつ深い理解を促したい。そうすることで、ほかの土地のことや、さまざまな社会課題、個々が抱える困難等にも目を向けるための想像力をも養う。

## 活動の内容

私たちがフィールドワークを重ねてきた三つの土地（石巻、陸前高田、丸森）を巡るアートスタディツアーを実施し、７名の参加者とスタッフらとともに対話を重ねながら旅をした。移動や滞在の間には、地域住民を案内人とする町歩きを実施し、まちの歴史や被災後の経験について教えてもらったり、講師によるプレゼンテーションを聞き、ほかの土地の事例を学んだうえで、ツアーで見聞したことと参加者自身が持つ関心事との共通性や応用可能性などについて議論をした。

## 参加作家、参加人数

ツアー案内人
（研究者、アーティスト）グレッグ・ドボルザークさん（早稲田大学）、山田一裕さん（東北工業大学）、七尾旅人さん、友部正人さん、磯崎未菜さん
（石巻市）有限会社熊谷産業 熊谷秋雄さん
（陸前高田市）永山悟さん、小野文浩さん
（丸森町）鈴木悦郎さん、宍戸克美さん、島津信子さんツアー参加者
一般公募による参加：7名（男性4名、女性3名）

## 他機関との連携

（石巻市）有限会社熊谷産業、NPO法人リアスの森、（陸前高田市）山猫堂

## 活動の効果

一般公募による参加者は、アーティストを始め、建築や地理学を学ぶ学生、被災地と表現活動の関わりに関心のある社会人など多様なバックグラウンドを持つ人たちであった。参加後のヒアリングでは、表現活動のヒントを得たり、環境省が行う潮風トレイルへの反映、自身の研究の対象地を丸森に設定するなど、各人にとって少なくない影響力があったという声が聞かれた。また、ツアーで巡った各地域の人たちにとっても、市内の住民ですらアクセスしづらいとされていた場所（北上川沿い）を知ってもらう機会に なったり、被災から時間が経ち、地域外からの関心が薄れつつある場所に興味を持ってもらえたなど好評の声があがった。丸森町では、後日町の公式フェイスブックにて本事業の様子が伝えられた。https://www.facebook.com/share/8D9aPnRzekNrvUy7/

## 活動の独自性

近年自然災害が頻発し、被災地となる土地が増える中、かつての被災地が忘れられていくスピードも年々早まっている。同時に、一般的な報道では各地の被災状況が似通ったもののように伝わってしまうことで、関心を持ちにくい状況が生まれている。本活動は、アートや表現を軸に据えることで、大きな物語からはこぼれてしまう個人的な語りや関心から、被災地の現状を学ぶことができるため、より具体的に「被災地の今」を知ることができ、参加者なりの関心の持ちどころが見つけやすいという点で、現状の問題解決の一端になると考える。
また、各地域の枠を越えて、被災経験や、そこから得た知見を共有する試みも少ないが、被災地の当事者同士が直接コミュニケーションを取ることは容易ではない。本事業では、参加者が「旅人」となって各地を結んでいくことにより、彼らを介して、訪問地に住む人が別の土地へ関心を持つきっかけにもなった。このような間接的な関わりが、いずれ被災地同士のコミュニケーションやネットワークづくりに発展していくのではないかと考えている。

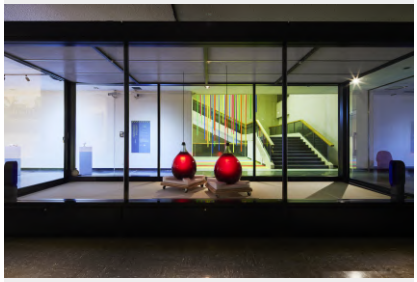
## 総括

二泊三日という短い時間であったが、参加者、スタッフ、地域の方々ともに、学びや気づきが多い充実したプロジェクトとなった。震災から13年の時間が経ってもなお、現場を訪れるとそれぞれにあたらしい発見があり、それらを共有することで、あらたな協働者として出会えた感覚があった。それはかけがえのないことである。
ただ、遠方から参加者を招き入れるためには、事前準備のフローが膨大となり、また当日も運営面で気にかけなくてはならないことが多く、対話やワークショップの質を上げるのが難しかった。とくに、地域の方々に負担をかけてしまったこと、彼らの持ち味を伝えきれなかったこと、スケジュールの詰め込みすぎで参加者の心身への負荷が大きかったこと、コミュニケーションの時間が十分に取れなかったことは大きな反省点である。
同じコンセプトで継続するならば、今回のようなコンパクトなツアーの形式ではなく、中長期的な枠組みにして、関係性をゆっくりと構築しながらフィールドワークを重ね、知識とアイディアを共有していく方が好ましいと感じたが、そのためには経済的な負担が増えてしまったり、参加者の時間が合わなくなったりとあらたな課題が出てくる。今回を踏まえて、よりよい形を模索したいと思う。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | マツモト建築芸術祭2024 | | | | |
| 団体名 | マツモト建築芸術祭実行委員会 | | 実施期間 | 2024年2月23日 ～ 2024年3月24日 | |
| 代表者名 | 齊藤 忠政 | 活動地域（都道府県名） | 長野県 | 詳細エリア | 松本市 |

ロゴ

エントランス



エントランス＆１F展示会場

## 活動の目的

国宝「旧開智学校」をはじめ、明治から昭和期のノスタルジックな建築物が数多く残る、長野県松本市。2022年1月初開催の「マツモト建築芸術祭」では、日本の近代化を象徴するそれらの建築物と、時代・地域・歴史に囚われないアート作品を、対比・融合・共鳴させるという新しい試みを行いました。
　本芸術祭は、世界的に活躍するアーティストらの芸術的な質の高さだけではなく、多種多様な「名建築」を再評価することで生まれる保全活動への機運や、周遊型の鑑賞スタイルによる観光・サービス業の活性化など、さまざまな視点から地域を活性化させる試みを目的としています。

## 活動の内容

今年度は取り壊される予定の旧松本市博物館をメイン会場として使用。国内外の１７組アーティストが参加し、建物内の各場所にアートを展示し、鑑賞いただきます。（他会場は新松本市博物館、信毎メディアガーデン）。また、豊富なアソシエイトプログラムにより、アートの生まれるところをより身近に感じていただきます。

## 参加作家、参加人数

参加作家１７組。参加人数（３１日間の総入場者数）６万5300人（無料展示、屋外展示を含む）

## 他機関との連携

松本市後援(名義後援ではない)、長野県名義後援、長野県全地域メディア後援。

## 活動の効果

多くのお客様がお越しになり、芸術祭を楽しんだ。来場者の６割は県外からお越しになった。内訳は東京など首都圏が多く、続いて関西、北陸からも多くのお客様がお越しになった。また県内のお客様も多くお越しになり、身近な場所で高いレベルのアートを鑑賞できることを喜んでもらえた。

## 活動の独自性

失われていく名建築を全面的に使用して、多くの現代アーティストが参加する芸術祭は稀。また冬季のこの規模の芸術祭を開催するのは地方では珍しい。

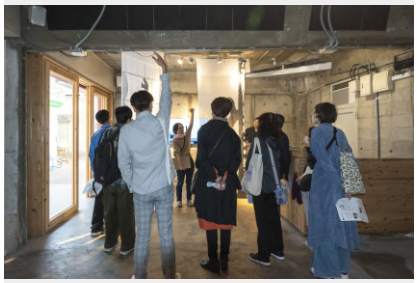
## 総括

松本市にとって冬は観光の閑散期で、この時期に芸術祭を開催することに、行政、飲食店、宿泊業など観光業界からも喜ばれた。この時期にも関わらず、多くのお客様にお越しいただき、成功に終わった。メディアからの評価も高く、全国にマツモト建築芸術祭のコンテンツを広く知らしめた。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 基いの町2023 | | | | |
| 団体名 | まほらプロジェクト | | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 |
| 代表者名 | 石松 紀子 | 活動地域（都道府県名） | 広島県 | 詳細エリア | 広島市中区基町 |

台湾作家キャンディー・バードと撮影アシスタントによる基町アパート内での映像作品制作風景

中国のお茶やお菓子を楽しむ「おとなりさんとお茶＆コラージュ作り」の様子



基いの町を巡るツアーの様子

## 活動の目的

まほらプロジェクトは、次の３つの目的をもって広島市中心部に位置する基町を拠点にアートプロジェクトを展開している。
①地域の記憶の継承、地域資源の活用
②多文化・多世代間の理解や交流の促進
③地域の「いま」の記録
基町は、高齢者が地域人口の約半数を占め、外国人住民は増加傾向にあるため、2023年度は特に、多文化・多世代間の理解や交流 を促進する活動により重点をおいた。

## 活動の内容

本プロジェクトのメイン事業として、台湾からの招聘作家、基町在住作家、継続的に本プロジェクトに関わる作家5名による作品制作と展覧会「基いの町2023 おとなりさん」を実施（9月30日（土）～10月29日（日）金土日開場（計14日）／会場として基町アパート内のスペースなど6カ所を使用）。
オープニングイベントとして、アーティスト・トークや参加作家による獅子舞パフォーマンスを実施。週末に、中国のお菓子やお茶を楽しみながら、お菓子の包装紙を使ったワークショップや、各展示会場と基町アパートを案内人と一緒に回り作品を鑑賞する「基いの町を巡るツアー」を開催（計11回）。また地域の児童館に通う小学生を対象にスチレンボードを用いた版画制作や、高齢者を対象に昔の写真を用いた回想法ワークショップを行なった（計4回）。

## 参加作家、参加人数

参加作家（5名）：キャンディー・バード、古堅太郎、イタイミナコ、鹿田義彦、魏双斌 プロジェクトメンバーを含む関係・協力者：50名
来場者：のべ674名
ワークショップ参加者：のべ186名

## 他機関との連携

本企画の実施にあたっては、基町アパート内での取材や作品制作・展示について、基町地区社会福祉協議会、基町連合自治会、基町プロジェクト（広島市立大学・広島市中区役所）、オルタナティブスペースコアや広島市立大学の協力を得た。
ワークショップの実施に際しては、児童館や高齢者関連3団体の協力を得た。

## 活動の効果

・台湾人作家の招聘を通じて、中国系の留学生や住民が作品制作に参加する機会を創出できた。関わった人数は少ないものの、展覧会終了後にもつながる密な関係性構築に繋がった。
・より気楽に参加できるお茶会/ワークショップの場は、住民らが立ち寄る場となり、住民同士、住民と団地外からの訪問者、あるいは留学生をはじめとする学生らとの交流に繋がった。

・基町アパートに住む作家2名が新たに加わったことで、内容の面で基町アパートでの展覧会としての独自性が増したほか、住民による 本企画の認知の向上及び来場に繋がった。
・地域回想法を用いた高齢者施設でのワークショップを通じて、継続的にワークショップを行うためのツール開発につながったほか、 展覧会を見に来られない層にもアプローチすることができた。

## 活動の独自性

・基町アパートという、広島の復興において歴史のある公営団地に固有の、多様な国籍の人々の共存、高齢化が進む中での多世代交流と記憶の継承といった課題に美術を通じて取り組んでいる。
・作品制作や展示への住民参加、大学との連携、基町で活動する団体との連携を通じ、より多様な人々を巻き込みながら企画を行なっている。
・地元の作家を中心に、一部の作家を複数年にわたり招聘することで、一回限りではない関係性、より深い地域の理解に基づいた作品づくりなどを試みている。

## 総括

2023年度は「おとなりさん」をテーマに「多文化・多世代交流の促進」に重点をおいた企画構成とした。作品制作やイベントを通じて、特に中国系住民の参加や認知を向上できたことは大きな成果である。一方で国籍が異なる住民同士の「交流」は限定的で、団地生活の中での変化を生むには、継続的な機会創出が求められる。基町での3年間の実践を通じて、美術が、日頃のしがらみを超え住民同士が出会い交流する場、あるいは作家や地域外からの訪問者らの視線から住民らが新たな関係性を開く場として機能しうる実感を強めている。来年度も引き続き、さまざまな取り組みを通じて、美術が可能にする関係性づくり、場づくりを試みていきたい。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | おおみかアートプロジェクト2023 ピザ窯大煙突プロジェクト | | | | |
| 団体名 | おおみかアートプロジェクト | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 | | |
| 代表者名 | 東 弘一郎 | 活動地域（都道府県名） | 茨城県 | 詳細エリア | 日立市大みか町 |

ピザ窯大煙突プロジェクト本番の様子(12/24 茨城県日立市にて実施)。行列が出来るほど、地域の方々が大煙突とピザを目当てに足を運んだ。

採掘作業員をイメージした衣装を着用したスタッフが調理に携わる。日立の大煙突をモチーフとしたワッペンも制作。

「ピザ窯大煙突」記録写真。オリジナルの鋼鉄製窯でピザを焼き、大煙突から煙が立ち上る。

## 活動の目的

大みか町の地域住民や町工場により深くアプローチをすることで、地域への帰属意識の向上と住民同士の交流の機会促進を図る。

## 活動の内容

2023年度は地域の職人とアーティストが協力し、日立の大煙突をモデルにした巨大な作品制作に取り組んだ。アーティストは地域の職人や工場からの技術的な支援を受けながら、巨大な彫刻作品を制作した。地域の職人や住民は「食」というきっかけからアートに触れることで、地域の中に新たな「煙突を囲んでつくるコミュニティ」を形成することを目指す。完成後は、大みか町と日立市を中心に様々な場所で大煙突の展示をし、煙突を囲んでピザを食べるイベントを開催。地域の人々は自分たちのまちで制作された作品を見ることで、地域の文化やアイデンティティを再確認することができる。

## 参加作家、参加人数

今年度はアーティストと運営を兼ねる形式で実施した。
主なアーティストはピザ窯大煙突の制作・イベント立案として、東弘一郎、浅野ひかりが参加して、プロジェクト全体を統括した。
12月24日のイベント参加者数は250名程、ピザ提供枚数は180枚程。2回目の2月25日開催の「第二回　大煙突フェスティバル」でのイベント参加者数は1600人程、ピザ提供枚数は160枚程。

## 他機関との連携

日立市地域の工務店や職人さん方、地域企業からのご支援に加えて、大煙突とさくら100年プロジェクトからのご協力があった。具体的には、地域の工務店である石井工務店や、石川工務店の職人さん方より、ダイニングの設計・制作や設営サポートをいただいた。新たに日立の大煙突を後世へ継承していく団体「大煙突とさくら100年プロジェクト」との出会いがあり、地域への周知・広報でのご協力や、主催として実施している大煙突フェスティバルへの出展をおこなった。イベントをきっかけに、アートプロジェクトそのものや大煙突を地域の方々に認知していただいた。

## 活動の効果

活動を通して、地域の方々が大煙突を再認識すると共に、地域の歴史へ再接続するようなきっかけができた。イベントへ参加した地域の方々の中には「大煙突があることは知っていたけど、折れてしまったことは知らなかった」「小学校の遠足で煙突を見に行ったことがある」などの声があった。ピザを食べながら大煙突を観ることにより、大煙突だけではなく日立市の地域を考えるような瞬間があった。また地域の小学校へチラシを配布したことにより、子どもたちが積極的にイベントへ参加する姿があった。イベント開始時間前から受付に並び、ピザを楽しみにしている様子が伺えた。

## 活動の独自性

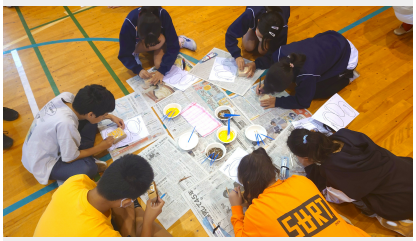
地域のシンボルである大煙突を展示することに加え、地域の方々が参加しやすいよう「食」の要素をイベントに追加した。100年前、日立市では銅精錬による煙害を企業と住民が協力し、たった1年で世界一高い煙突を建設することに成功した。しかし、1993年に大煙突は3分の1を残して倒壊してしまった。このような歴史的背景を踏まえ、再びアート作品として地域へ蘇らせるべくイベントを実施した。昨年度の「星と海の芸術祭」の反省を踏まえ、地域の方々へよりアプローチすべく、食の要素を取り入れた。アート×工業×食のイベントを実施することで、参加の敷居が低くなり、より多くの方々に楽しんでいただけた。

## 総括

おおみかアートプロジェクトは2021年から活動を開始した、茨城県日立市を拠点とした団体である。昨年は、地域の町工場の職人とアーティストが共同して作品制作を行う「星と海の芸術祭」を開催した。今年度は新たに「食」というテーマを追加したことで、短期間のイベントでありながらも沢山の方々にイベントを楽しんでいただけることが実現できた。
また制作プロセスの中では、運営メンバーが何度も日鉱記念館へ訪問して館長のお話を伺ったり、大煙突の設置を実現するために高度なテクニックや技術を要する場面もあった。更には飲食販売を実現するために、保健所の資格取得やプロのピザ職人のもとでピザの試作を何度も行った。たった1日限りのイベントであったが、1つ1つの壁は高く、その度に運営メンバーが顔をつきあわせて相談したり、外部への協力を募った。イベントを実施することも、巨大彫刻を展示することも、飲食を実施することも一筋縄ではいかないことばかりであったが、何とか地域の方々が喜んでもらえるような企画を実現することができた。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | ウォールアートフェスティバルふくしま in 猪苗代2023 | | | | |
| 団体名 | 猪苗代アートプロジェクト実行委員会 | | 実施期間 | 2023年4月3日 ～ 2024年3月29日 | |
| 代表者名 | 楠 恭信 | 活動地域（都道府県名） | 福島県 | 詳細エリア | 耶麻郡猪苗代町 |

ワィエダ兄弟による猪苗代高校生たちへのワークショップ「見えないエナジーをワルリ画で描く」



椎木彩子による小学生へのワークショップ「苗のともだちを描こう」

カトウシモンによる小学生へのワークショップ「天空を駆ける龍乗りの儀式~ 虹の色で自分の線を描こう」

## 活動の目的

2022年度までの5年間の取り組みを土台にアートを媒介に子どもたちが地域を見つめ、それぞれの中に吸収し、表現する機会を一層拡充する。また、地域のなかのアートの存在感を高め、地域と協働して作り上げるイベントへと昇華させていく。

## 活動の内容

(１)2024年度は小学校が６校から２校へ統廃合される。閉校となる４校は猪苗代町の中でも周辺部にあり色濃い地域の特色を持つ。町内南側の3校（翁島小、緑小、千里小）と北側の３校（猪苗代小、長瀬小、吾妻小）に分け、ワークショップと作品制作を行う。美術家・カトウシモン氏を招聘し、南側3校の児童に向けたワークショップと制作を行う。カトウ氏は、絵画と詩で物語を紡ぎ、音楽と身体表現を組み合わせたパフォーマンスにより生まれる空間そのものを作品とする。春から秋にかけてリサーチと音楽演奏を含んだワークショップで子どもたちと関わり合い、作品の土台を制作。そちらを猪苗代駅前に設置し、壁画として昇華する。
(２)猪苗代アートプロジェクトの一環として猪苗代高校の在校生と旧音楽堂をリノベーションしアートルームを設立した。そこへインド先住民ワルリ族の画家を招き、ジャングルに囲まれた村でサステナブルな暮らしをする彼らから見た猪苗代を描く。高校生を対象に、これまでに感じたことのある「目に見えないエネルギー」を描くワークショップを実施。作品を壁画に取り入れる。

## 参加作家、参加人数

椎木彩子　WS参加人数　216名
カトウシモン　WS参加人数　217名
ワィエダ兄弟　WS参加人数および制作ボランティア　90名

## 他機関との連携

猪苗代町教育委員会および町内各小学校（猪苗代小、長瀬小、吾妻小、翁島小、緑小、千里小）、福島県立猪苗代高校、NPO法人ウォールアートプロジェクト

## 活動の効果

（指標１）「子どもたちが五感を働かせ、それぞれが暮らす地域の特色を感じ取る」
統合を控える小学校、６校を、町内南北の３校ずつに分けて実施したワークショップと作品制作について。
各学校の校長先生との調整の結果、町内全校の児童とのワークショップを開催できることになり、規模が拡大したため、カトウシモン氏に、南部の３校（翁島小、緑小、千里小）、椎木彩子氏に北部の３校（猪苗代小、長瀬小、吾妻小）を担当してもらった。カトウシモン氏は、自身の経験から一人ひとりが唯一無二の存在であることを伝えるレクチャーののち、ドラムなどのパーカッション演奏と共に子どもたちが一筆に自分を込めて線を描くワークショップを行った。217名の筆が入った作品を猪苗代駅前の壁面に構成。その上に壁画「龍乗りの物語」を描いた。事業後に行ったアンケートには、「これまでに体験したことのない、自由に線を描くということが楽しかった」「想像以上に素敵な作品の一部になれて嬉しい」などの声が聞こえた。椎木彩子氏のワークショップでは子ど

もたちが自分の分身の「苗」を猪苗代町内で採集された木片に描いた。描かれた「苗」は、椎木氏の手によって二羽の鳥として作品となり、統合先である猪苗代小学校の体育館に展示された。「統合による不安が楽しみに変わったようだ」という校長の所見があった。子どもたちが自身を肯定したり、これまで育って来た猪苗代へ改めて思いを寄せる契機となり、その想いが作品として昇華された。また、猪苗代高校では、インドから先住民ワルリ族のアーティスト、ワィエダ兄弟を招き、壁画制作とワークショップを実施した。2016年にも滞在制作を経験したワィエダ兄弟は、7年経っても揺らぐことのない、猪苗代の自然が人々にもたらすエネルギーをテーマに壁画とワークショップに臨んだ。全校生徒が取り組んだワークショップは、今までに猪苗代で、人生の中で感じたことのあるエネルギーを描く、というテーマだった。抽象的なテーマにも関わらず、生徒たちは集中して自分なりのエネルギーを描いた。その作品は壁画の一部として取り入れられた。「この空間をカフェやギャラリーとしてどんどん活用していくべき」という生徒の声がアンケートに多数見られた。今回の事業を体感した子どもたち、約500名の中には、数年後、町を出る子も多くいるだろう。その子ども時代に、自分たちが暮らす地域について深く思いを馳せる機会を創出することができたことは、当初の目標を達成できたといえる。
（指標２）「猪苗代高校アートルームの認知度」
アートルームは、演劇のワークショップで使用されたり、県内外からの視察希望団体からのオファーがあるなど、街が外に開かれる窓の一つとしても機能し始めている。
アートルームの町内外の認知度の高まりは、リノベーションを終えた昨年よりも高まっている手応えがある。しかし、まだ知らない町民も見られ、この場を発信することに力を入れていく必要がある。高校生たちがモチベーションを高めていることにも希望が持てる。

## 活動の独自性

2018年度から6年間、学校を舞台にアートプロジェクトを実施してきた。芸術祭というとパブリックに鑑賞できる場所での制作や展示が主だが、本プロジェクトでは普段は一般の人たちが見ることができない場所での実施が独自性をもっていると考える。本プロジェクトの中心となる趣旨は、その学校に通う子どもたちがアーティストや制作過程、作品を通してさまざまな刺激を受け、感性や郷土愛を育むことである。さまざまな方々にその成果をお披露目する年に一回のお披露目も、自分たちの学校にこれだけ関心をもってくれる方々いるということを子どもたちや猪苗代地域の方々に感じてもらう機会となっている。

## 総括

今年度の事業では、このプロジェクトを猪苗代で開催するきっかけとなったインドのワルリ画家、ワィエダ兄弟が７年ぶりに来町したことで原点回帰の機会となった。彼らの持つ深い思想と猪苗代が宿すエネルギーとが融合した猪苗代高校に制作された作品は、この地域で展開するアートプロジェクトの真髄を表現し、この土地のさらなる可能性を伝えていくと考える。
また、6校から2校へと統合を控えた小学校でそれぞれ実施されたWSでは、椎木、カトウそれぞれのアーティストの持ち味が子どもたちと共鳴し、生き生きと自分を表現している姿が印象的だった。そして、統合の象徴として、子どもたちの作品を１つにまとめあげた作品は、統合することを不安に思う子どもの気持ちを前向きにする一つのきっかけともなった。
この6年間、中学校、小学校の統廃合を見据えて進めてきた本プロジェクトは、振り返ると町内に１７の作品を残している。今後は既存の作品を鑑賞するだけではない、壁画空間でのワークショップや、パフォーマンス、体験型の鑑賞、などプログラム面の充実を図っていきたい。そのためには、地域との結びつきをさらに強め、猪苗代の特色でもある豊かな食や、自然、歴史と関わる人々、団体とのコラボレーションの機会を増やし、アートを切り口として横断的な事業へと展開していく必要がある。また、外部から人を呼ぶための事業というだけでなく、内部、猪苗代町内に暮らす人々が元気になっていく、という側面をこれまで以上に大事にしていきたいと考える。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 湯の上フォーエバー！２ | | | | |
| 団体名 | 湯の上実行委員会 | | 実施期間 | 2023年10月13日 ～ 2023年10月23日 | |
| 代表者名 | 島貫 泰介 | 活動地域（都道府県名） | 大分県 | 詳細エリア | 別府市南部地域 |

紙屋温泉でパフォーマンスする東京ディスティニーランド

カラオケ大会の様子。壇上で歌うのは別府でカルトな人気を誇る「すーやん」

勝正光展会場前にて。トークショー参加者の集合記念写真

## 活動の目的

2023年10月13日（金）から同月23日（月）にかけて「湯の上フォーエバー！２」を実施した。展示部門である「勝正光ライフドローイング展『別府と描く』」のみ23日まで、コア企画となる紙屋温泉公民館でのパフォーマンス、「別府フォーエバー劇場」、「みんな主役だ！紙屋のど自慢」などは13日（金）から15日（日）までの週末に集中的に開催した。
　同企画の発端は、さらに一年前に開催した「湯の上ＦＯＲＥＶＥＲ！」にある。音楽家の蓮沼執太、空中ダンスを得意とする踊り子の若林美保を招いた一日目の賑やかな祝祭性は、コロナ禍を経て停滞していた地域活動の再始動を印象づける非常に意義深い内容だったが、個人的に強く心に残ったのは紙屋温泉公民館で行った二日目だった。
　大分ゆかりの落語家である月亭太遊による創作落語とダンサー／振付家である手塚夏子のワークショップ的作品は、どちらも観客の能動性を促す敷居の柔らかさ、生活との地続き感がある。それに加えて、温泉場の演芸場を意識した客席の配置や、そこで振る舞われるお菓子やお茶は、見ず知らずの観客のあいだの心理的緊張を和らげる効果をもたらすものとなった。出演アーティストらによるパフォーマンスのクオリティは当然重要だが、それ以前に私たちスタッフが行う「客席の設計」こそが、こういった小規模なイベントの成否を左右するのだということを、この時に実感した。
この発見を敷衍し、発展させようと構想したのが、今回の「湯の上フォーエバー！２」である。温泉地である別府のコミュニティスポットである公民館をアートスペースに変質させるというコンセプトはそのままに、今回は「ストリップ劇場を公民館に移築する」ことを「客席の設計」の具体的方策として用いた。また、人気踊り子である宇佐美なつやコトミドリ（ふだんは別名で活動）の集客力を頼りに、別府や大分県外で暮らすストリップファンの参加を促すことも戦略の一つであった。
　戦後すぐに誕生したストリップとその劇場には、出演者へのチップの手渡しや踊り子のポラロイド撮影販売など独特且つきわめて芸能らしいローカルな慣習がある。基本的に極小の舞台、劇場空間で行われるストリップでは演者と観客の距離が非常に近く、「その場にいる全員が作品をつくっていく」という相互作用的な感覚をしばしば覚える。その協働性は別府における公民館や温泉が持つ「自分たちのコミュニティを支えるのは市民自身」とも近いものであり、その2つを創造的に接近させることは、美術館や公共劇場という文化制度や社会階級に帰属しがちな既存のアートフォームへの批評でもあるのだ。

## 活動の内容

上記した公民館でのパフォーマンスや市民参加のカラオケ大会に加え、同会場の徒歩圏内にある「別府市創造交流発信拠点TRANSIT」では、別府で約15年間活動するアーティストの勝正光による個展「勝正光ライフドローイング展『別府と描く』」を開催した。
　勝が別府での活動を始めて以来描きためてきた別府市ゆかりの人々や風景などのドローイング原画を集めた回顧展である本展は、一人のアーティストの視点や営為の集積を通して、観客が別府の近過去をふりかえる機会をつくるというコンセプトのもと企画した。パフォーマンス企画が、大衆芸能の持つ協働性を援用した場づくりであるとすれば、本展が目指したのは作品を用いた場づくり、過去15年間のあいだに作家が培ってきた関係性の可視化・再構築にある。会期中には勝、写真家の藤田洋三を招いてのトークイベントも開催したが、こちらも立見客が出るほどの盛会となった。

## 参加作家、参加人数

参加作家：宇佐美なつ、コトミドリ、月亭太遊、東京ディスティニーランド、お魚大臣、勝正光
参加人数：300名

## 他機関との連携

勝正光個展は、BEPPU PROJECTが運営する「別府市創造交流発信拠点 TRANSIT」の公募企画として開催。企画段階から同スペーススタッフと密に連携して行った。そのほかにも、音響設計や当日運営などさまざまな面で別府市、大分市の民間組織、個人の多大な協力を得た。

## 活動の効果

「客席の設計」のアイデアに基づく企画・空間構成はかなりのレベルで大きな成功を収めたが、企画者である私の予想を超えた効果をもたらしたのが、遠方からやってきたストリップ客（スト客）と、どんな人も陽気に迎え入れる別府の観客たちの相性のよさだった。前述したようにストリップには多くのローカルな慣習があり、それを即座に理解し実行するのは難しい。だが、そういった数々のルールや振る舞い方についてスト客は積極的に別府市の客にレクチャーし、その過程で生じるコミュニケーションはすぐに親密なものとなった。またスト客のなかには周囲とのコミュニケーションを苦手とするタイプの人も少なくないが、3日間の鑑賞体験を通して徐々に客席の雰囲気に慣れ、ストリップ劇場ではあまり見せないポジティブな表情を見せることもしばしばであった。
　その雰囲気の醸成には別府で活動を続ける東京ディスティニーランドや月亭太遊の心地よい「客いじり」もポジティブな効果をもたらした。「客席の設計」を起点としつつも、それを拡張的に応用させていったのは他ならぬ観客と演者たちであり、そこで生じる異なる文化、生活圏を生きる人々の相互的な交流は、本企画が得た最大の成果だ。

## 活動の独自性

演者と観客による「協働」の実現が、本企画の最大の独自性であったと考える。

## 総括

しばしばコンテンポラリーアートは相互性を目的に掲げながらも、現実には「教える側」と「教わる側」、「与える側」と「享受する側」といった上下関係や片務的な「サービス」に基づく関係性を基軸としてしまう。そこでもコミュニケーションは生じるが、それぞれの人々の振る舞い方に大きな変化をもたらすことは稀だ。
　それに対して、「湯の上フォーエバー！２」ではさまざまな場面で役割や関係性の混淆が見られた印象がある。それはスト客が持つ経験や享楽を求める精神によるものであり、また別府市民のノリのよさや寛容性によるものであるのは明らかである。単に私が企画しただけでは、ここまでの成果は得られなかっただろう。その意味でも本企画は、別府だからこそ実現できたものだ。
　文化芸術にとってもさらに困難な時代が目の前にやってくる予感があるが、そのような状況で、個人としての自立性を獲得しながら、表現すること、表現に触れることの喜びに出会う機会を存続させていくことが重要だ。私にとってサイトスペシティフィやローカリティについて再考する機会が、「湯の上フォーエバー！２」であった。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | ROOTS & ARTS SHIRAOI -白老文化芸術共創- 2023 | | | | |
| 団体名 | 白老文化観光推進実行委員会 | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 | | |
| 代表者名 | 熊谷 威ニ | 活動地域（都道府県名） | 北海道 | 詳細エリア | 白老町と周辺地域 |

「アースダイブ白老/登別2023-アイヌ語地名から探る土地の記憶-」ワークショップ風景

「歩いて巡る屋外写真展」地元高校生との保全活動の協働、世代間交流の促進

「歩いて巡る屋外写真展」作業風景

## 活動の目的

1）地域資源、ひと、暮らし、風土、地勢、土地の記憶に光をあてる
2）新しい観点・手法・発信力を用い多様な価値観と創造性の理解伝達に努める
3）人と人・地域との絆、コミュニティ復興の契機となる
4）地域振興と経済活性、福祉教育の振興へ貢献する
5）住民と第三者が協働し地域の価値を「再発見、再編集、再構築」する機会の創出
6）住民の活力の創出、居場所や仲間づくり、人材育成（当事者・主体性意識向上）に努める
7）世界の多様性を尊重し、「共生の方法」を考える動機となり続ける

## 活動の内容

「アースダイブ白老/登別2023-アイヌ語地名から探る土地の記憶-」古い記憶や地図をヒントに歴史や風土を読み解くことでアイヌ語地名が息づいていた時代へのバーチャルなダイビングを試み、古地図を片手に土地を歩き、地形や景観、植生等を実感することでかつての人々の暮らしや生活環境を想像しながら、土地に息づく文化を体感する座学を交えた体験型フィールドワークプログラムを実施した。「歩いて巡る屋外写真展」白老町内の二地域（社台、虎杖浜地区）の海岸沿いを歩き、追想する日常生活の営みの記録を体感するプログラムにおいて、地域住民、地元高校生との保全活用活動を実施した。

## 参加作家、参加人数

アースダイブ講師→谷本晃久（北海道大学文学研究院教授）、マユンキキ（アーティスト、アイヌ文化アドバイザー）、菅野修広（登別市教育委員会学芸員）参加人数計20名、屋外写真展保全活用作業→参加人数計25名

## 他機関との連携

公益財団法人アイヌ民族文化財団/北海道教育庁胆振教育局/NPO法人北海道遺産協議会
白老町/白老町教育委員会/白老町町内会連合会/白老町商工会/白老建設協会/一般社団法人白老観光協会/協同組合白老商業振興会/虎杖浜竹浦観光連合会/一般社団法人白老青年会議所/白老町文化団体連絡協議会白老民族芸能保存会/白老美術協会NPO法人しらおい創造空間「蔵」/白老おもてなしガイドセンター/株式会社北海道新聞社/株式会社苫小牧民報社/株式会社室蘭民報社

## 活動の効果

アースダイブでは地元の土地に根付くアイヌ文化を感じ得る体感の提供ができた。フィールドワークを介した他者や町民同士とのコミュニケーション、多様な価値観への理解促進の場面が見られた。当日は外国人の参加者もあり、ポケトークを使用して多言語対応をした。参加者の満足度も高い評価であった。
屋外写真展においては地元高校との協働を図り、計10名の高校生が参加し、作品の保全活用、地域住民と当団体とのコラボレーションが存分に図られた。今後高校とは引き続き地域活動の協働を継続するという前向きな協議も行われ、地学協働においても十分な成果が上げられる結果となった。

## 活動の独自性

アイヌ文化の歴史、伝承が多く残る白老町、登別市において広域連携を行いながら、座学とフィールドワークを実施し、先人たちが暮らしていた同じ土地でかつての生活環境を想像できることは本地域以外では経験できない体験である。また、白老町内の東端と西端に位置する二つの集落に設置されている屋外写真展を保全活用することで、地域の歴史、魅力を再発見するとともに、周遊性の向上、消費活動の拡大、滞在時間の増加等白老独自の文化観光が推進されている。また、保存会を立ち上げ今後地域移行していくため継続性という点においても白老町の独自性がある事業になった。

## 総括

参加者の満足度の向上、初めての外国人対応、地元高校との協働、地域の世代間交流の促進等多くの収穫があった。また、写真展については地元保存会が発足し、地域移行までつながったことは一つのゴールの形を示したのではないか。今後も同様なプログラムにおいて、地域移行が図られ、地域に根付き、継続するという形態まで促していく活動を継続させていくことが当実行委員会に求められると考える。課題としては地元アイヌ協会との協働を図ることが出来なかったことが挙げられるため、次年度以降、当団体として信頼回復と新たな事業実施を含めて協働を図り、取り組んでいきたい。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | Don't Follow the Wind | | | | |
| 団体名 | Don't Follow the Wind | | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 |
| 代表者名 | 卯城 竜太 | 活動地域（都道府県名） | 福島県 | 詳細エリア | 東京電力福島第一原子力発電所付近の帰還困難区域 |

2023年12月、会場を提供くださっている協力者の方々と会場を視察

2023年12月、会場を提供くださっている協力者の方々と会場を視察

2023年12月、会場を提供くださっている協力者の方々と会場を視察

## 活動の目的

2023年度は、「①科学者との協働により、帰還困難区域の（人間以外の）存在の動向を調査・研究すること」「②海外に向けて活動を発信・紹介し続けること」「③政府により突然行われる解除（展覧会会場の公開）を視野に入れ、展覧会サイトの継続的な整備と保持すること」を主な活動目的とした。

## 活動の内容

Don't Follow the windは昨年末、このプロジェクトの会場の2つが除染区域対象となったという報せを地元協力者の方々から受け取った。除染期間は未定だが、除染後に展覧会をオープンできる可能性が高くなったということである。
遠くはない将来の公開に向けて、現在の状況に対する認識を周囲に高めてもらうため、地元住民の方々との対話とワークショップ、科学者を招聘し収集したデータを共有し、海外発信（展示•ワークショップ）を行った。
帰還困難区域内にある「Don't Follow the WInd」展には、まだ一般の人は訪れることができない。実行委員会は、展覧会や展覧会の会場周辺に、人間以外の訪問者（動物）が多数いることに気づいた。そこで科学者や研究者と協力し、1.どのような生物が会場周辺（および会場内）にいるのかを知ること、2.展示の公開が始まったときに、人間と人間以外の観客のためのスペースをどのように作ることができるのか、について研究を数年前から始め現在も進行中である。

## 参加作家、参加人数

(参加作家）艾未未（アイ・ウェイウェイ）、Chim↑Pom from Smappa!Group、グランギニョル未来、ニコラス・ハーシュ&ホルヘ・オテロ＝パイロス、エヴァ&フランコ・マッテス、宮永愛子、アーメット・ユーグ、トレヴァー・パグレン、タリン・サイモン、竹川宣彰、竹内公太　　以上12組
（キュラトリアル・コレクティブ）Chim↑Pom from Smappa!Group [発案者], 窪田研二、ジェイソン・ウェイト、エヴァ＆フランコ・マッテス　　以上4組
（実行委員）Chim↑Pom from Smappa!Group（アーティスト）、藤城里香（無人島プロダクションディレクター）、窪田研二（キュレーター）、緑川雄太郎（アートディレクター）、椹木野衣（美術批評）、竹内公太（アーティスト）、ジェイソン・ウェイト（キュレーター）、山本裕子（ANOMALYディレクター）
以上８組

## 他機関との連携

2023年度はコラボレーションが大幅に拡大し、研究が深まった。
•イノシシ•プロジェクト（チェコ共和国）：7台のフィールドカメラが寄贈された（現在は10台のカメラを設置中）
•The Earth Species Project（アメリカ）：現地に飛来する鳥と渡り鳥を識別するために開発したAIアルゴリズムを使って、現地に生息する鳥の個体数を初めて分析した。
•沖縄科学技術大学（OISTG）：新たな共同研究により、新たに 20本のフィールドマイクを購入し、現地に設置することで、科学者たちは、現地にどのような種類の鳥がいるのか、いつ活動するのかを分析し 、環境がどのように変化しているのかをより幅広く理解することを目的としている。
•ソウル大学造園学部：会場敷地内のCADマップを作成し、カメラで撮影した結果を地図上にプロットすることで、動物が会場内をどのように利用しているかを視覚的に表現する

## 活動の効果

活動目的の①については、海外から科学者（The Boar Projectのキーラン•オマホニー氏）を招聘し、共同研究の成果として学術論文が執筆された。
②については、現在進行中の状況に対する認識を高めるため、国内外での巡回展を続けた。「ノン•ビジター•センター」と題された展覧会は、Don't Follow the Windが開発した新しい3チャンネルのビデオを中心に構成され、過去10年間の生態系と景観の変化を紹介した。この映像には、地元住民や科学者のインタビュー、Don't Follow the Windのサイトでのフィールドカメラの共同調査による最近の映像などが含まれている。2023年度は2つの新しいノン•ビジター•センターがオープンした。ひとつはドイツの Kunsthalle Giessenで、地球上の長期的な変化を見つめる共同展（2023年7月）の一環として、もうひとつはインドのニューデリーにあるポリネーター（Pollinator）での『Don't Follow the Wind』の個展（2024年2月）である。『Don't Follow the Wind』はインドの一部の美術学校でカリキュラムの一部として教えられているにもかかわらず、インドで展示されたのは今回が初めてだった。現 地の観客の関心も高く、多様な観客が大いに盛り上がった。
③について。会場の一部が除染対象区域となったことで、これまで以上に密に地元協力者の方々と今後についての対話の場を多く持って、将来的な活動についてさまざまなことを共有することができた。

## 活動の独自性

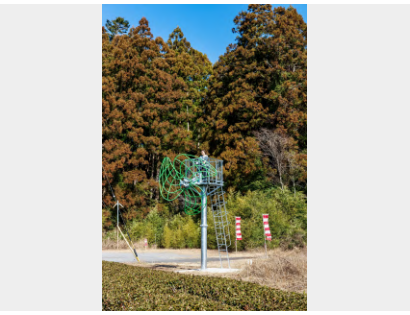
2011年以降、一般の人が立ち入ることができなくなった区域で活動を行い、この数年は人間以外の動物の調査を、海外の研究者とコラボレーションしながら進めていけるのも、2015年以来ずっと帰還困難区域内で作品を展示し続けそのための環境を整え、状況を世界に発信し続けたことによって得られたものである。外からはとてもわかりにくい活動ではあるが、地元住民、科学者、アーティストによるこの異例のコラボレーションは、このプロジェクトが現在の生態系をより深く知るために、そして未来に伝えるためのユニークな方向性だと考えている。

## 総括

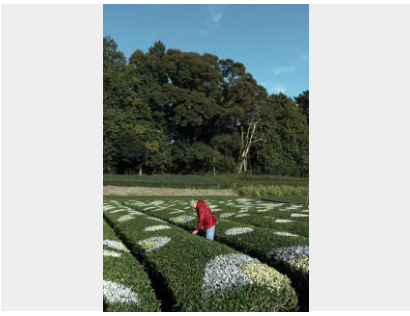
前述の活動以外として、2023年度には2つの大きなワークショップを開催した。ひとつは、福島の地元住民、猟師、森林管理者、そしてDon't Follow the Windと共同研究者たちによるワークショップである。
このワークショップでは、この森で何十年も過ごしてきた住民とフィールドカメラの映像を共有した。このワークショップは、Don't Follow the Windがどのように多様なコミュニティと協力し、この地域の将来の人間や人間以外の住民についてより広く考えるための研究を行ってきたかを、地元住民に初めて知ってもらう機会となった。住民たちにはかつて彼らが歩き回っていた森に移動してきた動物たちの映像を初めて見ることができ、また環境の変化について理解を深めていただいた。科学者たちは、2つの新しい動物がこの地域に生息するようになったことを発見することができた。地元住民、科学者、Don't Follow the Windのメンバーが相互に知識を共有・創造することで、より多くのデータで裏付けされ、学術誌にこれから発表されるだろう。将来的には、住民の帰還が始まるにつれ、そしてDFWの次の会場が公開されるときにこれらの知識と記録の蓄積は非常に重要になると考えている。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川 | | | | |
| 団体名 | 特定非営利活動法人クロスメディアしまだ | 実施期間 | 2024年2月10日 ～ 2024年3月17日 | | |
| 代表者名 | 大石 歩真 | 活動地域（都道府県名） | 静岡県 | 詳細エリア | 島田市及び川根本町 |

小山真徳／てのひら（photo:良知慎也）



東弘一郎／茶畑のサイクリスト（photo:良知慎也）



TAKAGIKAORU／抜里の茶畑に色を咲かせる（メインビジュアル）（photo:良知慎也）

## 活動の目的

当法人は2011年に発足。「スキだらけのまちづくり」をコンセプトに掲げている。地域やヒト、団体の「スキマ」を様々な取組で埋めたり、時に地域の余白を広げることで地域への愛着を増やす取組を進めている。無人と呼ばれるエリアに住む人々の「誇りの空洞化の解消。誇りと愛着の再認識」を行うための芸術祭の開催を目指し、エリアに住む人々が自発的な取組を生み出すことをミッションとしている。その先で、関係人口や移住者の増加を目指す様々な取組を行っていく。「アート」の持つ様々な役割のうち、地域社会で作用する新たな可能性を示し地域再生の取組にアートが有効であるという新たな指標としていきたいと考える。

## 活動の内容

2018年より芸術祭の開催を行い、作家や来場者を地域が受け入れる土台が強固になりつつある。 2023年度も芸術祭の開催は２～3月の1か月程度とした。11月頃から作家がエリアに入りリサーチと作品制作を行った。参加作家は継続参加作家と公募による作家とし、サイトスペシフィックな作品表現や、集落のリサーチや住民との関わりの中から 生まれていく作品とした。公募においては１か月～1か月半程度のレジデンスプログラムを行った。会期に合わせて同時開催する「アートプラット／大井川」は市民の文化プログラムでありこちらも幅広く募集しプログラム構築から相談対応を行って実現に向けて背中を押していく。また、ゲストハウスを活用した２泊３日でのアート研修の受け入れを行った。

## 参加作家、参加人数

19作家30作品（イベント・パフォーマンス含む）
＜インスタレーション＞東弘一郎・LEE ISOO・Instant Coffee・上野雄次・内田慎之介・形狩りの衆・木村健世・小山真徳・佐藤悠・さとうりさ・獅子の歯ブラシ×女子美術大学・泰然+きみきみよ・TAKAGIKAORU・中村岳・ヒデミニシダ・前田直紀・力五山
＜パフォーマンス＞　前田直樹・上野雄次・森繁哉・かずさ

## 他機関との連携

島田市「アートによる地域づくり推進事業」、アーツカウンシルしずおか（支援）、島田市、川根本町、大井川鐵道株式会社（協力）
島田市観光協会とは協働して電動アシスト付き自転車によるアート鑑賞モニターツアーの開催を行った。
また資材提供等、島田市内の中小企業20社程度から様々な形での支援をいただいた。

## 活動の効果

①来場者数
第7回展となる今回の来場者は約4万５千人に上り、全国各地に加え、海外からの来訪者もあった（韓国、台湾など）。前回を大幅に超える来場者数であり当芸術祭の知名度が高まっていることを感じた。加えて近隣集落からの来場者も増えた。域内の温泉やスーパーなど様々な場所で個別の作品や芸術祭の話題があがる機会が多く、複数年の取り組みを通じ地域全体における取り組みの浸透を実感した。

②サポーターの増加
サポーターは通年での地域活動や制作活動への参加を踏まえると約50名増加した。地域団体や地域住民だけではなく、全国各地から複数回参加するサポーターの姿が印象的であった。また、新たな層へのアプローチとし、２泊３日での県外大学生を対象としたショートインターンの受け入れを行ったところ、首都圏を中心に14名の参加があった。美術関係学科だけでなく地域づくり、歴史、人文学等の様々な学部からの参加があり、当プロジェクトが分野を横断した１つの学びの場としての可能性を感じることができた。
③地域の変化
地域住民有志を中心に構成される「抜里エコポリス」は、ほとんど全ての作家の制作の手伝いに関わり、そのスタンスと制作チームとしての力量なくては芸術祭ができないほど重要な位置を占めはじめている。「作家の意図を尊敬の中からくみ取り、手を出し過ぎずに制作協力を行う」「共に食事をし、関係を深めることで、作品と作家への理解を深め唯一無二の信頼関係を構築する」このことは作家にとっても良い影響を及ぼし、地域に入り、自身の代表作品と呼べる作品を作り上げることのできた作家もいた（小山真徳「てのひら」など）。アートがわかる／わからない以前に人と人の関係を紡ぎ、それが作品の完成度に作用することがアートによる地域づくりの根幹となっていく場面が多く見られた。
④作家、作品、制作について
今回は19作家、30作品の制作展示となった。（パフォーマンス・イベント含む）
小山真徳「てのひら」は2か月かけて当地での滞在制作を行った。制作にはスタート時からエコポリスと協働の中でスタートし、作家が意図する形や制作手法を理解した上で試行錯誤の中制作が進んでいった。エコポリスは制作当初から制作チームとして作家に信頼され、意見を出し合いながら制作が進んでいった。今回特筆すべきは、作家⇔地域との関わりの強さから生まれるものはこれまでも多くあったが、作家⇔作家のコラボレーションや支援の動きが見られたことである。
小山作品は開幕前夜、徹夜で朝までの作業となった。その際には同じく参加作家である上野雄次と東弘一郎が仕上げの手伝いを自発的に行っていたり、森繁哉の公演会場がさとうりさ「くぐりこぶち」で行われたり、前田直紀と上野雄次のパフォーマンスが実現したり、かずさ「碗琴道島田流」のパフォーマンスを、小山真徳「てのひら」や中村岳「訴求空間」で行ったり等のコラボや協力体制が生まれていったことである。
レジデンス施設「ヌクリハウス」での滞在の中、作家同士の交流や制作に触れることで作家同士の関係やリスペクトの気持ちが生まれていく場面が複数あった。
このことは、ゲストハウスに作家だけが滞在していても起こる現象ではなく、媒介役としてのエコポリスの存在が大きいものと感じる。エコポリスがいることで単独で制作を行う作家も「寄り合い」の場に参加しやすくなり、媒介の存在があることで作家同士も交流と理解が促進されていった。エコポリスが作家同士の媒介役としての役割を意識せず自然に行うことができるよう、我々はコーディネーター役として、黒子として場を回すことを徹底した。

## 活動の独自性

「無人」というキーワードのもと、人が減ることで、手が入らなくなる場所やコト（空き家や空き店舗、耕作放棄地、祭り、無人駅など）が、当芸術祭によって、新たな価値を見出すことができたと言える。そして、アーティスト等と地域住民との関係性の深さや信頼関係の強さは印象的であった。主体的に制作に参画する住民たち、福岡から毎月足を運ぶサポーター、年間を通じて農作業に関わるアーティストなど、無人とよばれる場所で人と人とが関わるプロジェクトへと成長した。7回展を経てアートプロジェクトを活用した「地域の土台作り」として大井川流域住民が誇りを取り戻すことに寄与できたといえる。地域住民とアーティストがこれだけ関わりを持つ芸術祭はないといえ、同時に、新たな地域芸術祭の姿として一つの到達点に辿り着くことができたと考える。
今後は、「地域とアートが地続きに接続されたコミュニティづくり」を目指し、イベントにとどまらない活動へと発展させていきたいと考える。アートの本質を、住民の営みと地域活動の実践として捉え、大井川流域における学びと参画の場の創出に取り組んでいきたいと考える。地域活動にアートを効果的に活用する、作品の発表だけでなく制作の過程での多様な人材の参画に、作家の成長や地域コミュニティの変化が見られること、これらの特徴を今一度整理し、来場者数や作品の規模ではなく独自の、新たな地域芸術祭としての価値を今後につなげていきたい。大規模な国際芸術祭や地域芸術祭が数多くある中、我々が行ってきた「UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川」の特徴と実績を可視化した上で今後の「アートを活用した新たな地域再生への取り組み」を模索していきたい。
今後の実践に当たっては、7年の間に積み重ねることができたものは数多い。作家と地域、作品と制作プロセス、作品づくりのノウハウ、管理手法、耕作放棄地や空き家等地域の荒れていく場所の活用方法、作家選定ノウハウ、作品プランづくり等々、半農半アート等生み出すことができたものは多いと感じる。また一方、芸術祭イベントの開催における来場者数や作品の規模だけにとどまらない、関係性の深度、誇りなどの指標作りについても検討をする必要があると感じる。また、プロジェクトの実施体制（組織体系、運営資金、開催頻度、支援者の確保など）の課題が多い。それらを踏まえ、今後の静岡県の地域における文化芸術の在り方、接続の方法を考察するとともに、未来に向けた地方部のロールモデルづくりに向けて活動したいと考える。地域づくりの視点は元より、文化創造都市（地域・街）という視点において静岡県中部エリアで何ができるかを模索したい。

## 総括

　無人駅を現代社会の象徴と捉え、アートを手法に地域をあらわし発信するプロジェクト「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川2024」（以下、無人駅の芸術祭）が2024年3月17日をもって閉幕した。7回展となる今回は19組の作家による合計30の作品を制作展示し、各イベントプログラム等を開催した。会期中は全国各地に加え台湾や韓国といったアジア各国からも多くの来場者があった。
　作品会場及びパフォーマンスの舞台は、大井川流域に位置する島田市及び川根本町の計４エリアにて会場を設定した。作品数の最も多い抜里エリア（集落全域）を中心に、島田エリア（島田駅前通り、川越し街道）、金谷エリア（大井川鐵道代官町駅・日切駅、KADODE OOIGAWA）、川根本町エリア（三ツ星小学校、青部地域）となった。設置場所としては、無人駅ホームや駅舎、空き家や空き店舗、耕作放棄となった茶畑や竹藪、農作業小屋などが主な会場となった。地域における様々な遊休空間が芸術祭と共に蘇り開示されていく点が特徴であった。
　アーティストによる作品表現においては、大井川流域の様々な資源が軸となり、大井川や茶畑の雄大な風景など土地の持つ力を表現する作品や、地域の人々の記憶や伝承など集落に生きる人々が介在する作品が創作されていった。いずれの作品も大井川流域の土地に根差した「ここでしか表現することのできない」作品となった。
　作品制作の過程においては、地域団体をはじめ、多くのサポーターや住民に協力をいただいた。特に抜里エコポリスにおいては、芸術祭を動かす重要なエンジンとなっている。作品会場の検討から作品の土台や制作をチームとして進める姿や、会期を通じた作家や来訪者との関わりには感動をおぼえる。県内外のサポーターは、通年での地域活動の作業に参加するとともに、作品制作への参加や会期中の運営など、地域住民との交流を楽しみながら参加する姿が印象的であった。

今展での特徴的な取り組みを三点あげる。

一つは、東アジア文化都市2023静岡事業に関連した韓国アーティスト3名2組の参加である。約1ヶ月にわたる2回の滞在制作において市町内の小中学校等でのアウトリーチ活動などを実施した。受け入れ側となる地域において初の海外アーティストであったが、幅広い交流とともに滞在から制作への支援が行えた。多様な人材を自然に受け入れる地域土壌づくりが複数年での芸術祭の取り組みを通じた成果であると考える。

二つに、関係人口事業を通じ抜里地域で受け入れを実施した、女子美術大学によるフィールドワークの成果発表の場を芸術祭にて設定した点である。学生たちのリサーチ滞在の場面において、数十年の間、表に出ることのない「獅子頭」と出会った。各人の制作とは別に「獅子頭」への調査を行うとともに、住民とともに復活の演舞を実施し映像に記録した。地域に眠っている資源の再発掘に創造的な視点を持つ異分子が入ることの意義を痛感した。

三つに、地域課題に対する発展的な視点である。耕作が放棄された茶畑を活用したアート作品が多数登場してきた点である。小山真徳「てのひら」、ヒデミニシダ「音の要塞」、TAKAGI KAORU「抜里の茶畑に花を咲かせる」などは、広大な茶畑の刈り取りや整備を複数日かけて地域住民や県内外のサポーターとともに実施をした後に作品制作へと入った。また、東弘一郎「茶畑のサイクリスト」、さとうりさ「縫い合わせ」など、茶畑に対する新たなアプローチをアートにより実践することができ、同時に作品の設置を快諾した地域における当取り組みへの信頼と理解の深度を実感することができた。地域の枠を越え、県内外各地から、通年で一年に何度も茶畑への作業に参加する多くの人々の姿をみると、耕作放棄茶畑は地域課題とは言えない。多様な人々が集い、交流し、活動する重要なフィールドであり舞台へと変化したのだと痛感する。

当芸術祭の７回にわたる開催を通じ、アートの先で地域への再発見を導くことを主目的とし「無人駅エリアの風景や人の営みを開示する」という点において１つの到達点に達することができたと考える。なにより、「抜里エコポリス」をはじめとした住民の変化、アーティスト達との絆、そして多様な人々の行きかう集落の変化は芸術祭をはじめた７年前からは想像もできないような目覚ましい変化を遂げている。

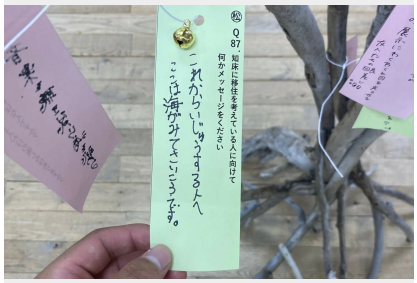
今後は、より民俗学の視点を有した取り組みへと変化させ、大井川流域の集落から生まれ集落が動かす新しい地域芸術の姿を模索したいと考える。大井川の持つ特異性とともに、地域農業、コミュニティ、四季折々の風景への道しるべという地域の「日常〜ケ」にアートが存在し、アーティストという人間が地域に混ざっていく姿を目指してく。

確かに人は減っていく。減っていくから地域は消滅するのか。我々はそんなことはないと断言する。現代社会が効率化、スピード化の先で捨てていくもの、数値や既存の価値の中で“お荷物”的存在になっていくもの。アートによりそれは日本全体にとっての新たな価値となり無人と呼ばれる地域がひらいていく姿は１つの奇跡と呼ばれるかもしれません。我々はこの希望のプロジェクトの歩みを止めることなく進めていきたいと考える。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 葦の芸術原野祭 | | | | |
| 団体名 | 葦の芸術原野祭実行委員会 | | 実施期間 | 2023年8月4日 ～ 2023年8月19日 | |
| 代表者名 | 川村 喜一 | 活動地域（都道府県名） | 北海道 | 詳細エリア | 斜里郡斜里町 |

『葦の波 Part2』の二回目の公演が行われました。『葦の波 Part2』は岩村朋佳、川村喜一、川村芽惟、黒木麻衣、今野裕一郎、坂藤加菜、中條玲、中山よしこ、橋本和加子、松本一哉、本藤美咲（敬称略）によって行われています。また、昨年のPart1に参加していた加賀田直子のシーンが引き継がれ、斜里という街で交錯する、いくつもの存在と不在が立ち上がります。上演は、野外→1階→2階という3部構成のツアー形式で行われます。2部の最後には、中山よしこによる「斜里ラップ」が披露され、斜里で生まれ斜里で育った彼女による、斜里への愛憎のこもったリリックに胸を打たれたという感想が殺到しました。実行委員たちがこの地で経験した出来事や思考が折り重なった他にない舞台となり、全日程とも満席となりました。

バストリオによる『セザンヌの斜里岳』を遠隔会場にて上演しました。野外劇のため、前日まで天気予報とのにらめっこが続いていましたが持ち堪え、濃ゆい雲の向こうに斜里岳を想像する上演となりました。過去に開拓しようと生きた人／これから場を拓こうと生きる人の土地である"川村邸～北暦の原野"に、総勢30名以上のお客様が集まり大盛況のうちに幕を下ろしました。




一階の「どうわのへや」ではぬり絵のできるお絵かきコーナー、岩村朋佳制作の流木でできたおもちゃなどがあり、子どもたちの遊び場になってます。この日は子どもたちがここでぬり絵をしている姿を見ることができました。また、この「どうわのへや」では音楽家の松本一哉とその友人である斜里出身農家の大森英晶、そしてあしげい実行委員総出による参加型展示の「シレトコノオト」が行われました。二人が考案した100の質問が壁一面に貼られています。来場者はおみくじを引いて、そこに書かれている質問に答えます。北海蔵の七夕が８月であることに因んで、回答は短冊に記載し、流木でできたオブジェに結びつけるというものです。老若男女に関わりなく、誰もが参加しやすいプロジェクトの一つとなりました。

## 活動の目的

当団体は、知床の抱える課題の解決、及び地域の文化振興に寄与すべく、知床に固有の文化、風土、自然環境そのものに対する世界観を様々な手法で表現し、広く発信することで、古くから持続する文化と新たな創造性とが地続きに融和することを目指します。
「葦の芸術原野祭」では、アートによる地域文化振興を目指し、知床半島に脈々と続いてきた人々の文化的な営みを、創造的、多角的な視点でとらえなおし、多様な表現をすることで、地域の魅力を再発見していきます。

## 活動の内容

2023年、参加や出会いがあり、引越していく人や閉店してしまうお店があります。こんにちはとさようならが、葦芸にとっても当たり前のこととなり、またその尊さを噛みしめられるようになりました。祭典という非日常を超え、日常に溶け込んでいく挑戦の一年になりました。場所をうつろい、人々をいざなうプログラムを実施しました。
1.パフォーマンス
■町民を対象に、タンスで眠っている古いハンカチを集め、一連のガーランドに縫いつなぐパフォーマンスを行いました。
■セザンヌの斜里岳@川村邸～北暦の原野
画家のポール・セザンヌが山を描く際の態度に着想を得て、山に向き合い、山へ分け入り、山と一体となる人間の姿を言葉と音によって描いた野外劇。1年をかけて作られた建物から始まり、斜里岳を望む草原へと観客をいざなう移動型の発表でした。
■前作に続く『葦の波part2』では、おもいでうろうろプロジェクトでお預かりした思い出の品とその持ち主を紹介するシーンや、斜里町という場所を想って生み出された「斜里ラップ」が披露されました。全回満員となりました。
2.展示
■地域作家による作品展示では、葦の芸術原野祭に向けて作られた新作や、これまでに制作された作品が旧役場庁舎に集いました。
■毎年お盆をまたぐ形で開催されている葦の芸術原野祭で、写真家であり狩猟者の川村喜一によって弔い、祈るような空間展示が行われ反響を呼びました。
■中山よしこらがオープンした「ヒミツキチこひつじ」にて、黒木麻衣が斜里町を想って描き上げた数多の新作を発表しました。
3.参加型プロジェクト
■初年度から継続している「おもいでうろうろプロジェクト」2023では、133点の思い出の品が集まりました。
■おはなししゃぼん玉による紙芝居
民間サークル「おはなししゃぼん玉」によって、子どもたちのために大型紙芝居が披露されました。
■気のいいアヒルによる朗読をはじめとしたプログラム「あしげいラジオ」
「語り継ぐ女の歴史」という伝記集の一節が読まれたほか、実行委による対話が会場内で放送されました。
■服づくりワークショップ
「しゃりコレ」とのコラボ企画で、端切れや古着を活用して、子どもたちが思い思いの洋服作りに挑戦しました。
■だれかのどこか×斜里高校

斜里高校の生徒８名と先生が街に散らばって集めてきた無数の映像をランダムに繋ぎ合わせて完成した映画『斜里（2023年のだれかのどこか）』を期間中、会場で上映しました。
■シレトコノオト
質問が書かれたくじを引き、自分なりの答えを短冊に書くというプロジェクトです。
町内外にかかわらず、多くの方にご参加いただきました。
初年度に掲げた通り、葦の芸術原野祭は人々の交流を生み出し、そして予想を超えて、たくさんのものをもらい受けて成長しました。量が厚みになり、確たる厚みによって物語ることができると信じて次へと進んでいきます。
実施までの流れ

---

2023年3月　　「葦の芸術原野祭2023」のHPを公開
2023年5月　　斜里町公民館での町民交流企画「しゃりコレ」とコラボし、ワークショップを実施
2023年5月　　葦芸オリジナルパフォーマンス作品「葦の波 part2」の制作を開始
2023年6月　　斜里高校でワークショップを実施
2023年8月　　「葦の芸術原野祭2023」会期

## 参加作家、参加人数

12日の開館で　768名の来場者数を記録し、そのうち98名がリピート来場でした。
全体数のうち6割が町内、4割が町外からの来場であり、未成年者の合計は49名でした。
「おもいでうろうろプロジェクト」の参加者は133名となり、公演観覧者は199名となりました。

---

参加作家一覧
川村喜一、川村芽惟、今野裕一郎、黒木麻衣、中山よしこ、小林大祐、橋本和加子、松本一哉、坂藤加菜、船木大資、真青果てな、岩村朋佳、大森英晶、Airda、山田涼子、中條玲、本藤美咲、佐々木恒雄、あかしのぶこ

## 他機関との連携

「土地の声を継承し、今を生きる多様な表現者によって、今日の文化を築くこと」を理念に掲げ、他機関との連携を図りました。
・知床博物館の協力のもと、郷土史の価値啓発
・斜里町立図書館との共同展示
・本芸術祭を通して斜里町への移住を促進し、地域おこし協力隊へ
・斜里町における交流と表現の新しい拠点となる「北暦」との連携
・姉妹都市である弘前市の文化振興課との意見交換
・斜里町立公民館との連携、ワークショップの開催

## 活動の効果

３年の継続開催を経て、町内では芸術を広く柔らかく受け止めようとする風向きを作ることが実現しはじめています。来場者の声を積極的に聞き、初年度にいただいた「よくわからない」「変わったことをしている」という印象、そういった意見から、「わからなくてもいい」「おもしろい」と言ってくださる方が増えました。理解することが全てではなく、会話や参加を通して異なりを尊重する交流を起こせていると確信しています。また、本芸術祭の実行委として参加してきたメンバーのうち二人が移住し、地域振興の一環としてアートを取り入れた福祉活動に携わっています。このことを、未発見の地域課題を認識できる機会・公的施設や行政のあり方にも好影響を与えられる機会であると捉えています。

## 活動の独自性

１．固有性　～知床の声を語り継ぐ～
　世界自然遺産として知られる知床半島ですが、その文化的側面はあまり知られていません。知床・斜里町にはかつてより人々の暮らしがあり、海洋漁猟を生業としたオホーツク文化、アイヌの文化、開拓の歴史など、厳しくも雄大な風土のなかで培われた文化的な価値が根付いています。一つの歴史観では捉えることのできないこの文化的地層は、語られてきたもの、あるいは語られなかったもの、失われゆくものを含みながら、今日を生きる私たちの地平に種々の芽吹きを与えています。
私たちは、このような土地の歴史と文化に敬意を持ち、その固有性を何よりも大切にしています。
あしげいにとって重要なのは、「手付かずの自然」や「額に入った絵画」ではなく、ここで私たちが育てるもの、収獲するもの、作るごはん、肌で感じ、心に抱き、放たれる声です。
あしげいの会場となるのは、この町のシンボルとして100年近く人々に愛されてきた「斜里町旧役場庁舎＝旧図書館」です。老朽化のため使われていなかったこの建物を活用するなかで、再びこの場所に人々が集い、記憶や想いがめぐるようになりました。
　空っぽの建物を大きな樹洞（うろ）に見立て、人々の思い出の品を展示する参加型プロジェクト「おもいでうろうろプロジェクト」では、「樺太の地図」といった歴史的なモノから、「お父さんのトラクターの模型」といった何気ない日常を慈しむモノまで、老若男女が様々な想いを持ち寄り、大きな歴史には残らない郷土史や個人史が綴られています。
２．　対等性　～表現者は生活のなかへ、生活者は表現のなかへ～
あしげいは、「地域に生まれ育った者」、「移り棲んだもの者」、「外部からやってくる者」という立場の異なる三者によってつくられています。
地域内外の有志が情熱をもって集まり、対話を深めながら、企画と運営、創作と発表を一体的に実践していることがあしげいの特徴です。

この三者三様の立場を尊重し、対等な関係のもとに生まれる創造性を大切にすることが、あしげい２つ目の理念です。
芸術祭の運営を通して、アーティストは一過性の巡回展や地方公演に留まらず、長い時間をかけて町の人々との交流を深め、いつしか友人のように、「生活」のなかへと浸透しています。
一方、地域の人々は、芸術祭を通じて、生まれ育った風土の素晴らしさや特異さを再発見するように、「表現」のなかへと踏み込んでいます。
あしげいを続けてきた中で、地域のおはなしサークルの方々が自発的にみずからの過去を語り始めるようなシーンが生まれてきています。
「アーティストと地域住民」、「地元とよそ者」といった差異を尊重しながら、それを飛び越えていくあしげいというフィールドには、「すべての営みが表現である」ことを発露させる可能性が広がっています。

## 総括

今年を含めるこれまでの三年間は、この先の葦の芸術原野祭が、知床斜里という土地から発信していく新しい文化活動を始めるための足掛かりでした。
これからの三年間ではこれまで街に住んできた人たちや出会った人たちと作品を発表したり、活動をさらに道東へと認知してもらう次のフェーズに入っていく時間になります。このあしげいという活動は、過去も現在も未来も手放さないでこの土地で生きていく文化活動の可能性を追求するためであり、そこに向けて継続するべきだという手応えがあります。
人間の一生は80年近くです。
一人の人間の歴史よりもとてつもなく長く土地は残っていきます。この土地に生きる人間や生き物たち、植物が、自然が、この先も続いていく時間を夢みてあしげいが繋げていきたい文化というのは、一つの命が持ちうる可能性とその他に存在している各自が育んでいる文化が尊重されたまま出会い、価値観を認め合って共に生きていけるのかという普遍的なテーマを持った願いのようなものです。土着的なもの、移民的なもの、異なる土地で生きるものとが交流を行いながら文化的な発展を継続していく可能性を提示する新たな芸術祭の確立を目指しています。
・Quality（質）ー歴史
・Accessibility（近づきやすさ）ー現在
・Possibility（可能性）ー未来
全てを離すことなく、すでにいたものたち、外からやってきたものたち、外からやってくるものたちの立場を尊重して活動していきます。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 熊本地震で損壊した田中憲一作品を修復して御船地域の文化復興を牽引する事業 | | | | |
| 団体名 | 熊本地震 田中憲一の画を救う会 | | 実施期間 | 2023年4月10日 ～ 2024年3月23日 | |
| 代表者名 | 渡邊 秀和 | 活動地域（都道府県名） | 熊本県 | 詳細エリア | 御船町を中心とした上益城地域。 |

IWAI ART研究所で、作品輸送の打合せ

御船町で田中作品の「帰郷展 II 」を開催

「フットパス」で浜田知明が学んだ御船高校へ

## 活動の目的

熊本地震で被災してから６年８カ月かけて修復活動を進め、被害がひどかった田中憲一の油彩画の代表作最後の５点の修復が完了した。それらの作品を千葉のIWAI ART保存修復研究所から熊本の御船町に安全に持ち帰るのが今年度の一番の目的である。無事に運んで、御船町で作品の「帰郷展 II 」を開催し、作品が甦って帰郷したことを地域に伝え、町民に紹介したい。作品の帰郷を祝って、田中氏ゆかりの地域の芸術家の作品展も同時に開催する。御船町の美術・文化の歴史をたどる「フットパス」は、コロナが落ち着いたので町外からも参加者を募り、開催し地域の魅力を伝える。

## 活動の内容

１　IWAI ART保存修復研究所に行き、修復が終わった被災油彩画５点を確認し、御船町に運送する日程の打合せを行う。
２　作品を御船町に運び、代表作が見事に甦ったことを伝えるために、御船町カルチャーセンター・ホワイエで田中憲一修復作品「帰郷展 II 」を行う。
３　被災作品の“帰郷”を歓迎するために、御船町の芸術家による「御船町美術・工芸協会展」を同時期に開催する。
４　御船の美術をテーマにした学習会「田中憲一と私」を開催し参加を呼び掛ける。
５　御船町に残る美術品や文化財を巡る「フットパス・知明少年の通学路を歩く」を開催、コロナが落ち着いてきたので高校の校舎内に入り浜田作品や田中作品を紹介する。

## 参加作家、参加人数

１　絵画保存修復家・岩井希久子、岩井貴愛
２　「帰郷展」＆「美術工芸協会展」出品作家：田中憲一、吉田都基子、福永幸夫、輝功、竹田津純、渡邊ヒデカズ、髙田一道、津金日人詩　来場者：209人／4日
３　学習会「田中憲一と私」　講師：竹田津純　参加者：47人
４　「フットパス」　スタッフ：10人、参加者：14人

## 他機関との連携

IWAI ART保存修復研究所、御船町、御船町教育委員会、御船町文化協会、御船町観光協会、熊本県文化協会、熊本日日新聞社、TKUテレビ熊本、（一般社団法人）アートネットワーク熊本みふね など。

## 活動の効果

熊本地震の後、保存修復家の岩井希久子氏が来熊され、作品の応急手当を実施。被災油彩画150余点の最後の修復が昨年度までに終了し、御船町へ運送し「帰郷展」開催。いまだ復旧半ばにある御船町民をはじめ多くの人々に修復して甦った作品を見ていただくことができた。会場の都合で４日間開催だったが、TVや新聞報道もあり、地震からの復興を感じ、美術作品や文化財の修復・保全という活動を理解していただく機会になった。

## 活動の独自性

地震で全壊したアトリエから地元画家の作品150余点を救出し、修復して「地域の宝」として保存・展示して未来に伝えようというプロジェクトであり、公的な支援がない中、被災した地域住民有志と駆けつけた専門家が一緒になって活動を始め、8年後の現在も継続している。それは、これまでこの地域で細々と取り組んできた地域の芸術文化の再興と美術による地域の振興を推し進めることになった。被災した重要作品のほとんどの修復・保全が、多くの個人・団体・企業などからの協力を得て、完了した。それらを展示・紹介し、いろいろなイベントを続けながら、地域の美術文化への関心を高める活動を行っている。

## 総括

熊本地震 田中憲一の画を救う会は、2016年7月に熊本地震の震源地の一つである御船町で、地震で全壊し雨曝しになった地元作家の故・田中憲一のアトリエの油彩画を修復して、「地域の宝」として未来に伝えようと結成した。田中憲一は晩年、地域の芸術文化の再興の活動を熱心に行い、没後は地域住民や教えを受けた人たちで「遺作展」が開催され、作品のデータを作成・保管し、作品は作家の自宅アトリエに収納していた。2016年7月から2023年3月までの活動で、被災した作品の中で重要な作品のほとんどが絵画保存修復家の協力で修復され、この間「アートによる地域振興助成」も受けることができ、「熊本地震被災作品公開修復展」や「被災／レスキュー展」等で活動を紹介しながら、地域では定期的な「御船の美術・学習会」の開催や地域の美術品や文化財を巡る「御船町フットパス」などのイベントを継続してきた。これからは、まずこの７年間の活動のまとめとして「熊本地震・被災作品・修復報告展」の開催と『報告書』の作成をめざし、さらに地域活動に取り組んでいく予定である。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | クロスプレイ東松山 | | | | |
| 団体名 | 医療法人社団保順会 | | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 |
| 代表者名 | 辻 守史 | 活動地域（都道府県名） | 埼玉県 | 詳細エリア | 東松山市 |

アサダワタルプロジェクトでの利用者、小学校児童とのレコーディング風景

リサーチした民話の朗読をする仁禮洋志氏（公募アーティスト）

活動報告＋クロストークの様子

## 活動の目的

埼玉県東松山市内の高齢者福祉施設「デイサービス楽らく」に常設のアーティスト・イン・レジデンス機能を設置。美術・文学・音楽・演劇・舞踊・伝統芸能等のアーティストを招き、作品創作やリサーチを通じて利用者や職員と文化的な交流を重ねることにより、施設での日常に、非日常的な要素と、新たな出会いや発見をもたらすことを目指す。
地域の文化・教育施設等と連携し、アーティストと住民との交流を行うことで、福祉施設が地域内の様々な人にとっての文化的な出会い・交流が起こる場所として機能することを目指す。
また地域内外の文化・福祉・教育機関との連携や、実践者・研究者との交流を通じ、活動で得られた知見を広く発信することで、芸術と福祉の関係を元にした新たな地域づくりを提言し、全国各地での新たな実践に繋げていくことを目指している。

## 活動の内容

①アソシエイトアーティスト
前年度から継続してアサダワタル氏を招聘し、プロジェクト「また明日も 歌ったような」を実施した。アーティストが長期滞在する中で生まれたデイサービス楽らくのテーマソングを、デイサービス楽らく利用者や職員、地域の小学生児童が共同でレコーディング。制作された音源は、小学校の通学路となっているデイサービス楽らく前の時計台に、時報として設置した。また、ミュージックビデオを制作。YouTubeにて広く一般に公開した。
https://www.youtube.com/watch?v=peve7SAuGXU
②公募アーティスト
当初予定の4名を超える、7名を採択。
美術・舞踊・演劇・短歌等の分野のアーティストに参加いただいた。
滞在期間終了後に、滞在経験を元にした作品を制作するアーティストが多い。
③ネットワーク構築
アサダワタル氏の作品公開と合わせて、地域内外で福祉・芸術活動に携わる人をゲストに迎え、活動報告＋クロストークを一般に向けて開催した。地域内外の福祉・芸術等が多く参加し、知見を共有するとともに、関係者同士のネットワークを構築する場を設けた。
④成果の発信
アーティスト滞在の様子等をnoteで随時発信した。
https://note.com/crossplay
また2022年度、23年度2年間の活動について、成果報告書を編集した。24年度以降、冊子として配布することで、活動成果の普及に取り組む予定である。
また外部メディア等を通じての情報発信では、NHK総合「ひるまえほっと」「おはよう日本」にて紹介されたことで、活動の認知度を高める結果となった。さらに、日本科学未来館の新たな常設展「老いパーク」でもクロスプレイ東松山のインタビュー映像が展示された。今後10年間以上の目安で展示されることから、中長期的に広く取り組みの意義を普及する効果を期待したい。
⑤人材育成（新規）
実施過程では人材育成として、芸術文化と福祉・まちづくりへの関心を持つ2名のインターン生を迎え、インターンシップを実施することができた。

## 参加作家、参加人数

①参加作家　8名

・アソシエイトアーティスト：アサダワタル
・公募アーティスト：桂融（美術）、仁禮洋志（美術）、浅川奏瑛（舞踊）、竹中香子（演劇／ドキュメンタリー）、青木麦生（短歌）、野村眞人（演劇）、萩原雄太（演劇）
②参加人数
・デイサービス楽らく利用者　65名
・デイサービス楽らく職員　20名
・東松山市立唐子小学校4年生児童　40名
・アサダワタルプロジェクト公開記念イベント（クロスプレイ東松山活動報告＋クロストーク含む）参加者数　40名

## 他機関との連携

①福祉と芸術の専門性を有する一般社団法人ベンチと事業を共同主催。ケアマネジメントや介護支援といった自団体の職能を持ったスタッフと、アートコーディネートやプロデュースといった芸術文化分野の職能を持ったスタッフが共同することで、多職種連携のモデル的仕組みを作ることができた。
②アサダワタル氏のプロジェクトにおいては、前年度に事業を共同した東松山市民文化センターの協力により、東松山市立唐子小学校と連携。総合的学習の時間を活用し、4年生児童にデイサービス楽らくに訪問してもらうほか、有志児童13名の参加が参加してデイサービス楽らくのテーマソングを、利用者と一緒にレコーディングした。完成した時計台音源のお披露目にも児童が参加し、利用者と共に完成を祝った。同校の先生方も活動内容を高く評価しており、次年度以降の連携も予定している。
③原爆の図丸木美術館と連携し、学芸員の岡村幸宣氏に公募プログラムのアドバイザーとして、プログラムへの助言や、トークへの参加をしていただいた。また逆に、丸木美術館の出展アーティスト等が、デイサービス楽らくを滞在場所とすることもしばしば発生した。宿泊したアーティストによっては、美術館での新作制作のために利用者に地域の歴史をリサーチするなど、高齢者福祉施設ならではの環境を活用していただいいた。

## 活動の効果

評価アドバイザー（長津結一郎氏）の協力を得て、デイサービス職員、アーティストに対するアンケートを実施し、クロスプレイ東松山の特性となるキーワードを抽出し、利用者・職員・アーティスト間相互の影響を図式化した。その結果、職員にとってはプロジェクトを通じて介護のあり方を新たな視点から見つめ直す機会を得ていること、利用者にとっては認知症等の改善だけで なく、異なる人々との交流が生活の一部となり、外部からの注目を浴びることで誇りや自信を取り戻すケースもあることが明らかになった。またアーティスト自身は福祉現場の様々な感覚とのギャップに戸惑いながらも、介護現場のクリエイティビティに触れることで、自らのアート観を再考する契機として捉えていることが分かった。

## 活動の独自性

高齢者福祉施設を活用したアーティスト・イン・レジデンス自体が非常に珍しい取組といえる。その上で、芸術と福祉それぞれの専門分野の人々が、日々過ごす時間を一緒に取ることによって、互いに境界を揺るがし／揺るがされながら、新たな価値観を生み出していくそのプロセスにこそ、本プロジェクトの最大の特徴であると言えるだろう。またその結果、アーティストは滞在中の作品制作に比重を置かず、むしろ異文化との出会いに浸った後、滞在終了後に経験をベースにした作品を発表するスタイルが生まれていることも、レジデントとして極めて特徴的な傾向と言えるだろう。

## 総括

プロジェクト2年目となる本年は、様々な挑戦を行うことができた。
プロジェクトの存在が認知され始めたことで、アーティスト公募には20名の応募があり、独創的な滞在プランが多く寄せられた。このため当初予定の4名を超える7名を公募アーティストとして採択し、多様なスタイルで滞在いただいた。
これらアーティストの活動を通じて、プロジェクトの特徴が明瞭になってきた。特に「利用者が次に会った時には一緒に何かをやっていたことを忘れている」という、介護福祉施設ならではの特徴は、アートプロジェクトを達成したいアーティストにとっては試練となることも多いが、この特徴をアーティストが受け入れて考えることで、固定観念を超えた表現が生まれる機会となっていた。福祉施設という特徴からは、アーティストとして無条件に受け入れられることはないが、人として尊重され受け入れられることで、一度自身につけていたレッテルを自ら剥がして、表現に向き合うアーティストが多くいることが印象的だった。
また、地域との連携面では、それまで積極的な交流のなかった地域内の施設同士とともに、プロジェクトを通じてこれからの地域のことを考えていく基盤ができたことは有意義だった。
また有難いことにNHK総合や日本科学未来館での紹介など、プロジェクトが社会的に注目される機会も増えてきた。
今後の課題としては、第一にはプロジェクトに携わる人材、財源の確保が挙げられる。
介護保険制度の下運営される通所型介護福祉施設において、外部財源を主に、いかに持続可能な文化プロジェクトを実施できるか、体制整備が問われる。
また質的な面では、デイサービス楽らく外での実践も視野に入れた上で、より包括的な支援体制の構築や、異なる専門性を持つ人々が協力し合うための場づくりのあり方を考えていきたい。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | イミグレーション・ミュージアム・東京 | | | | |
| 団体名 | 特定非営利活動法人 音まち計画 | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年2月29日 | | |
| 代表者名 | 岡部 修二 | 活動地域（都道府県名） | 東京都 | 詳細エリア | 足立区 |

対話型鑑賞プログラムの様子

中学校でのアートワークショップの様子

海外ルーツのアーティストワークショップの様子

## 活動の目的

美術家の岩井成昭が主宰するIMM東京（2010年～）は、地域に居住する海外にルーツをもつ人びととの交流を通じて企画されるアートプロジェクトです。地域に暮らす彼／彼女らの生活様式や文化背景を紹介するとともに、それが日常の中で変容していく諸相を「適 応」「保持」「融合」という3つのキーワードから探ってきました。本事業では、活動を通して多文化社会を知り、考え、参画していくためのプラットフォームの形成を目指し、足立区の多文化化について考えていくきっかけづくりを行っていきます。

## 活動の内容

今年度は、昨年度に引き続き足立区内の小学校を対象とした多文化社会に触れる「アート•エデュケーションプログラム（EDP）」 を2校（中川北小学校•鹿浜第一小学校）と、中学校1校（扇中学）で実施した。小学校では、各校で1限目から5限目まで連続したプ ログラムとして設計することで、小学校を1日限りの「イミグレーション•ミュージアム」として見立てた。中学校では、美術部の協力により、美術部の活動日（毎週火曜日）に4日間通い、毎週異なるワークショップを行うプログラムを実施した。
小学校で実施したEDPでは、4つのステップで構成したプログラムを実施した。(1)IMMの趣旨説明や自分のルーツを伝える自己紹介、(2)一般社団法人アプリシエイトアプローチによるアートカードや既存の美術作品の画像を使った対話型鑑賞、(3)フィリピン出身のアーティスト、ラルフ•ルンブレスによる「システム•トライアングル」という、つながりのある役割や職業のひとと正三角形になるように距離を保ちながら動くアクティビティを用いたフット•ペインティング、(4)(1)から(3)を振り返りながら1日の体験をリーフレットにまとめていくワークショップを行った。
中学校では、美術部の協力のもと、2月に毎週一回の部活動の時間を使って、アーティストのクロエ•パレとともにアート•ワークショップを4回実施した。4回のワークショップでは、厚紙に『鉱物』に模した模様をレーザーカッターで切れ目を入れたオリジナルキットを生徒一人ひとりに配布。生徒たちとのディスカッションを通して鉱物のもつ特徴に紐づけ、自身や周りの人びと、周りの環境、そして未来について思考する中で作品を制作した。

## 参加作家、参加人数

参加作家等：6名（小学校：（一社）アプリシエイトアプローチ4名、ラルフ・ルンブレス、中学校：クロエ・パレ）
参加人数：208名（小学校：138名、中学校：70名）

## 他機関との連携

足立区シティプロモーション課、足立区立中川北小学校、足立区立鹿浜第一小学校、足立区立扇中学校美術部

## 活動の効果

小学校の児童へのアンケート結果では、約95%が好意的な回答をし、教諭へのヒアリングにおいても「絵を見て何がいいのかを観る視点、初めはなかったけど見る視点が広がっていくのを感じとれた」（鹿浜第一小）や、「継続することで、自分の意見を持つ能力が伸びていくように感じた」（中川北小）といった評価をいただき、多角的な視野•思考を持つことや自己肯定感の向上へ寄与した 可能性が示された。また、中学校では「ただ一緒につくるだけでなく、つくる環境（音楽）や表現の多様性を知る機会になって、子どもたちにとって刺激になった」（扇中）といったように学んだことをアウトプットすることへの言及もなされていた。

## 活動の独自性

本事業の独自性はこのアートエデュケーションプログラムが、「文化芸術に触れる機会の少ない方々に演奏や表現を提供」に留まらず、内なる国際化がすすむ足立区において、対話型鑑賞によって国籍問わず個々人の価値観の違いに気づき、海外ルーツのアーティストによるワークショップなどの交流を通して、多文化社会について考える機会としているところに独自性を見出している。また、今年度は海外ルーツのアーティストと中学生がより多くのコミュニケーションが取れるように定期的に通う形態での事業も実施した。

## 総括

児童•教諭からの満足度は高く、教諭へのヒアリングでは、児童の自己肯定感の向上に寄与する可能性があることも示された。ただし、残念ながら今回のプログラムでは、多文化社会への理解に繋がったかどうかは判断できなかった。とはいえ、実施後に子ども達から自主的に海外ルーツのアーティストに話しかけにきて、自分のルーツ（フィリピン／中国など）を紹介する場面も何度か見られたことで、海外にルーツをもつ児童の自己肯定感の向上に何らかの影響を与えた可能性は見てとれたことや、個々人の視野の広がりや自己肯定感の向上（個々の差異への肯定にもつながる）の先に多文化社会への理解へと繋がっていくと考えられることから、引き続き小学校•中学校と連携しながらプログラムの改善を重ね、多文化社会につながるプログラムとして足立区内で期待される事業として根付くことを目指す。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | Cliff Edge Project うぶすなの水文学 | | | | |
| 団体名 | Cliff Edge Project | | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 |
| 代表者名 | 住 康平 | 活動地域（都道府県名） | 静岡県 | 詳細エリア | 伊豆市貴僧坊 |

うぶすなの水文学 ダンスと雅楽演奏のコラボレーション公演「water energy」

うぶすなの水文学展貴僧坊水神社の漆原夏樹と千賀基央の作品《生々流転・ミヅハノメミコト図》

松本圭司によるガイドツアー「火と水と神々と」

## 活動の目的

本事業は、地質遺産と災害史をモチーフとし、伊豆半島に対する地域住民の学びの創出と地域価値の再発見の促進を目指している。過疎化する山間地域である伊豆市貴僧坊地区周辺の住民の方々が美術展、雅楽演奏、ダンス公演を通して地域の新しい価値を知ることで、半ば希望を描くことに消極的になっている地域の未来に対して少しでも張り合いの出るきっかけを作り、住民が地域に対してプライドを持つことを促すのが目的である。また、美術作品やダンス•演奏などを創作するにあたって、アーティストたちが取材をし、地域を学ぶことで完成させていくプロセスを大切にし、作品に深みを与えるのもこのプロジェクトの目的である。

## 活動の内容

本事業は、伊豆市貴僧坊地区の住人からの依頼で行われ、今回の助成対象期間を含め２カ年計画で実施された。１年目の2022年は、貴僧坊地区の周辺地域をアーティストが取材し、また、関係有識者によるレクチャーを受けながら、翌年に実施する美術展、ダンスと雅楽の公演に向けての準備を行うリサーチプログラム。２年目の2023年は、美術展、ダンスと雅楽演奏の公演及び関連イベントを実施した。
【活動１】ダンサー小暮香帆氏による地域住民向けのダンスワークショップ。
期間：2023年9月15日(金)・10月13日(金)　会場：貴僧坊公民館
内容：貴僧坊公民館で月１回開催される周辺住民の体操教室「ロコトレ体操」の場にダンサーの小暮香帆さんが講師となってワークショップを実施。椅子に座りながら上半身をゆっくりほぐし、２人１対になって鏡になったように動いて言葉のないコミュニケーションをするというもの。
【活動２】美術展「うぶすなの水文学」(1)美術展(2)前夜祭(3)ダンスと雅楽演奏のコラボレーション公演
期間：(1)は、2023年10月14日(土)～11月11日(土)29日間。(2)(3)は、ともに2023年10月13日(金)
会場：(1)は、貴僧坊公民館、貴僧坊水神社、民宿カプリコーン、平成森鮮組屯所、井上倉庫。(2)は、貴僧坊水神社。(3)は、井上倉庫。
内容： 今回のプロジェクトのメインとなるイベントであり、水の循環と信仰という広大なテーマで、伊豆の山間地域、貴僧坊及び姫之湯地区を会場とした現代アート展であった。参加した13名のアーティストは、日本画、木工、写真、映像、陶芸、インスタレーション、ダンス、雅楽と多彩でそれぞれが与えられた「水」をテーマに展開するものであった。５つの会場に美術作品が展示され、10月13日には、展覧会の開催開始の前夜を飾るパフォーミングアーツのイベントとして、コンテンポラリーダンスと雅楽演奏を貴僧坊水神社と井上倉庫で開催した。
【活動３】水文学者浅野友子氏×地形研究者鈴木雄介氏の対談「貴僧坊の地で水のふるまいに思いを馳せる」
期日：2023年10月21日　会場：貴僧坊水神社
内容：今回の展覧会のテーマのひとつでもある水文学の研究者浅野友子先生と貴僧坊をはじめとする天城山麓の地形に詳しい鈴木雄介さんの対談で、資料を使いながら水文学の考えや水による貴僧坊周辺の地形地質の造成について語られた。
【活動４】民俗学者畑中章宏講演会「水の信仰と芸術」
期日：2023年10月21日　会場：貴僧坊公民館
内容：民俗学者の畑中章宏氏に全国の水の信仰と貴僧坊周辺地域の水の信仰について語っていただいた。中でも、2022年のリサーチプログラムの際に訪れた貴僧坊周辺の地域の水にまつわる信仰に触れながら日本の神話だけではなく世界の神話にも触れる内容だった。
【活動５】地域ガイドによるアートと地形のガイドツアー
期間：展覧会期間中５回　会場：ツアー目的地各地
内容：地域雑学を対象とし、地質・地形や歴史など広くその土地のことを知る松本圭司氏の案内による展覧会開催地域周辺のガイドツアー。貴僧坊水神社を中心に筏場までの地域を散策した。

## 参加作家、参加人数

【活動１】参加作家：小暮香帆氏　参加人数：ロコトレ体操に参加している地域住民　9月15日17人、10月15日11名
【活動２】参加作家：荒木佑介氏、伊藤允彦氏、BACCO、漆原夏樹氏、千賀基央氏、大久保美貴氏、永冶晃子氏、西野壮平氏、小暮香帆氏、大塚惇平氏、中村香奈子氏、三浦元則氏　参加者数：（１）537人（２）50名（３）42名
【活動３】参加者：浅野友子氏、鈴木雄介氏、イベントに応募してきた一般市民　参加者数：23人
【活動４】参加者：畑中章宏氏、イベントに応募してきた一般市民　参加者数：23名
【活動５】参加者：松本圭司氏　ツアー募集に応募してきた一般市民　参加者数： 26名

## 他機関との連携

伊豆市貴僧坊地区の住民の皆様には、公民館、貴僧坊水神社をお貸しいただき、また、この地域で森林保全や環境活動に取り組む、一般社団法人平成森鮮組の山下隆氏には、会場の提供だけでなく、地域への広報誌「うぶすな通信」の配布、各種認可手続き、作品制作のサポート、搬入搬出等多大なるご協力をいただいた。
貴僧坊地区のある八岳エリアの各区長の皆様には、広報誌「うぶすな通信」の配布にご協力いただいた。
また、伊豆市教育委員会、一般社団法人美しい伊豆創造センター、FM ISみらいずステーション、静岡新聞社・静岡放送、静岡大学未来社会デザイン機構からの後援をいただき、FM ISには、CMや番組出演などでご協力いただいた。静岡新聞には、アーティスト西野壮平氏の作品制作プロセスの取材などもしていただいた。西野壮平氏の丸木舟の制作には、彼のスタッフだけではなく、修善寺の林業会社アラハラスヤッホの吉田氏や、中伊豆の自然学校またね村のオーナー斉藤氏、姫之湯地区の工務店KINEYA の山下氏、地元のカヌー愛好者などの協力者も加わった。
展覧会の運営メンバーは、会場監視スタッフも含め、おおかたが地域外のスタッフだったが、「ふだんはアートに触れたことはないけど、監視員をしているうちにこの展覧会がどういうものなのか（なぜここで開催するのか、ひとつひとつの作品のテーマなど）がわかってきた」という方や、貴僧坊の自然の中で展覧会が行われることに対して高く評価する方、「なんだかアートはわからないけど、楽しく関わらせてもらった」とおっしゃる方など、展覧会に対する理解や捉え方は多様であった。

## 活動の効果

今回の活動の前身となる2022年の活動では、アーティストによる地域のリサーチ及び有識者によるオンラインレクチャーとその報告を年度末に行うという試みをした。
この企画が立ち上がった時には、地域の方からの協力の姿勢は非常に消極的なものであった。しかし、このような地域の中に入っていくのに、2022年の貴僧坊水神社での雅楽演奏は非常に効果的だった。最初は、「一発だけの打ち上げ花火で終わらせるだけだろう？」と不信感を募らせていた元区長さんが、開催年の春には、「ぜひ盛り上げてくれ」と言ってきてくれ、地域住民の展示に切り絵を出展してくださった。来客からは、「この山間地域にこのような美術展が行われていることが奇跡的だ」とか、「よくここでやってくれた。」などの声が聞かれた。また、ダンスと雅楽の公演には、小暮さんのワークショップの参加者をはじめ、地域の方も多く見にきてくださった。
展覧会の期間ひと月だけでも貴僧坊地区は普段とは異なる空気が流れたのではないか。特に貴僧坊水神社での展示は、神像を展示するというわかりやすいものだけあってか、地域の方だけでなく、この神社に湧く湧水を汲みにきた人も足を止めて見入っていた。 展覧会場で実施したアンケートには、118名の回答があった、そのうち、展覧会に対する満足度では、「満足」が71名、「やや満足」が27名（83%の方が満足またはやや満足）、「やや不満」と「不満」という回答は0だった。また、スタッフの応対については、満足が93名、やや満足が13名（89%の方が満足またはやや満足）、「やや不満」と「不満」という回答は0だった。
アンケートの自由記載欄から得られた評価のうち特に気になるものは以下の通り（詳細は、別添のアンケート集計結果を参照）
•作品が土地と一体化していた。会場の土地を含め楽しめた。
•一つ一つの作品の完成度が高く、土地の神聖さとあいまって、異世界にいるかのようでした。
•各アーティストの質が高く見応えがあった。貴僧坊という土地の面白さに出会えた。また、この企画がなければ貴僧坊を知ることもできなかった。
•作品だけではなく、地域の歴史や環境についても教えていただき、作品への理解が深まりました。
•作家が長い時間リサーチされ、ていねいに作品を作られているのが伝わってきて楽しめました。以上、展覧会に対する個別具体的な評価は、かなり高い評価を得たと感じる。
地域からすればこの展示が一度だけでは終わらず、ビエンナーレ形式でもトリエンナーレ形式でもいいので継続して開催されることが望ましいと考える。そういった気運は地域から起こってほしいが、われわれのプロジェクトは、伊豆半島各地を転々とすることが目的なので、Cliff edge projectがその役割を担うものではないと感じている。

## 活動の独自性

Cliff Edge Projectは、これまで、「アートによる災害史のアップデート」及び「地質遺産の再発見」を二大テーマとして美術展の開催を中心とした活動を行ってきたが、今回は、伊豆半島の水の流れという大きな自然の営みをテーマとしたため、これまでのプロジェクトテーマから離れた初めての展覧会となった。
今回の会場のひとつである貴僧坊水神社の持っている条件が素晴らしく、災害をテーマにするどころではなかったと言える。境内に湧水があり、その水で氏子の方々がわさびを育てている。そしてそのわさびで得た収入を神社の維持費にあてているというのだ。このシステムがすでに魅力的なストーリーを持っており、しかも、お祀りされているのが水の神様だと言うのだ。その会場となる地域の独自の信仰と自然科学の持つテーマ性は、この展覧会に他にはみられない特徴を与えていると思う。
「水文学」は、自然界における水の発生、移動、分布を含む多様な水のありようを科学的に分析する学問である。日本でも年間降雨量の多い天城山と一級河川狩野川を中心とした大小さまざまな川の流れ、そして、その流れが太平洋に注いで再び水蒸気となって雨を降らすという水の循環がまさに水文学を象徴しており、この視点で伊豆半島を語ることがプロジェクトの新しい試みとして面白いのではないかと考えた。そして、これまでに水や自然をテーマにしたり、地域の信仰と民俗学をテーマにした経験のあるアーティストに的を絞って出展、出演依頼をし、2022年から地域をリサーチすることや、有識者のレクチャーを受講してもらうことをアーティストに課して、作品制作のための下地づくりをプロジェクト側が率先して行う点がこの事業の独自性であったと言える。

## 総括

事業を終えてみて、YouTube での記録動画やホームページ上のリサーチプログラムの報告書の公開、報告集の刊行を通じて、この展覧会がどのようなものだったかを広く一般に伝えるとともに、これらの情報を整理しながら、プロジェクトを運営する側として、どうあれば理想的なプロジェクト運営ができたのか、次回以降の展望などを頭に描いている。
これまでの展覧会が、代表者である住のワンマン運営だったこともあり、組織化、運営の効率化は、今回の企画の始まった2022年からの大きな課題だったが、参加アーティストが多くなってしまったり、山間地域での展覧会の集客の難しさ、地域住民とのコミュニケーションの難しさなどほかの課題も出てきた。アーティストにはこまめな連絡を行うとともに、定期的にヒアリングをし、制作状況や搬入出の方法などを確認してきた。また、集客に関しては、これまでターゲットにしてこなかった、地域の商店、公共交通機関などにも働きかけたほか、新聞折込によって伊豆市の広域に広報を行った。地域住民とのコミュニケーションはもう少し注力しても良かったと感じるが、緩やかだが、課題のひとつひとつを解決してきた末に展覧会が開催できたと思う。アンケート結果や来場者の会場での反応を見ていると、展覧会や関連イベントに対する満足度は高かったように思える。2年間の苦労が吹き飛ぶ嬉しい反応だった。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 原泉アートデイズ！2023 | | | | |
| 団体名 | 原泉アートプロジェクト | | 実施期間 | 2023年10月12日 ～ 2023年11月26日 | |
| 代表者名 | 羽鳥 祐子 | 活動地域（都道府県名） | 静岡県 | 詳細エリア | 掛川市原泉地区全域 |

中国人アーティスト２名による一般・地域住民向けのアーティストトーク後の記念写真

中国人アーティストが地元企業の協力を得て常設作品の設置をしている様子

月一サロンにて、哲学者を招いて行った哲学サロンの様子

## 活動の目的

原泉アートデイズ！は、HARAIZUMI AIR（原泉アーティスト・イン・レジデンス）の成果発表の場としての展覧会である。2023年度は、HARAIZUMI AIRを通して、以下の2点を目的に活動した。
【①地域との連携・交流を発信】HARAIZUMI AIRのなかで、地域と国内アーティストや海外アーティスト、国内（近隣）アーティストと海外アーティストなどの連携や交流を促し、さまざまな場面において、交流の現場を紹介。
【②「原泉=アート表現・活動が日常にある地」というイメージを根付かせる。】地域全体を会場とし、2018年より毎年HARAIZUMI AIRを通して展覧会を開催してきた。その結果、地域住民にとって、アート活動は日常の風景である。こうしたイメージを年間通して発信し、地域外の人々にとっても当たり前の存在として、地域の中の選択肢の一つとして根付いていくようなプロセスの年とする。
更に「原泉アートパーク化構想」を掲げ、地域全体でアートが楽しめる場として開放するための土台作りを行う。

## 活動の内容

①海外アーティストの制作活動を通した連携や交流機会創出。
・原泉内の子どもたちに、制作に参加してもらい、制作を通して中国のこと、アーティスト活動のことを発信。地元PTAと連携を行い、子どもたちの夏休みのアートワークショップの機会とした。（Artist: 施琦/中国）
・地元企業（地元工務店、森林組合）の力を借りて、野外常設作品となる彫刻を設置。この作品は地域内の神社に設置され、地域住民だけでなく、地域の企業等に知ってもらう機会となった。（Artist: 柯明/中国）
・AIR参加の総括として、施琦と王墨石は、作品制作や原泉での体験を発表するアーティストトークを行い、作品制作や原泉での体験を地域住民や関係者等に改めて広めた。
②年間を通したアート活動の推進、発信。月一サロンの開催。
・4月から11月の原泉アートデイズ！開催までのHARAIZUMI AIR実施期間中に、さまざまなアート活動等を推進し、アート活動が日常にあることを発信。その一環として、月に一回サロンを開催し、定期的に気軽に一般の方が立ち寄り話せる機会を創出した。

## 参加作家、参加人数

・参加アーティスト　１１組
Robin Owings、井口貴夫、松島家（誠・礼・花）、西村卓、和田峻成、
作戦（野々上聡人、秋山佑太、有園絵夢、弓場勇作）、HABURI、
明石雄、施琦（SHI QI）、王墨石（MOSHI WANG）、柯明（KE MING）
・来場者数　のべ1,000名

## 他機関との連携

・2018年以降連携してきた協賛団体、サポーター、協力団体と、連携体制を継続。
・今年度は、静岡文化芸術大学や掛川市と連携を行い、展覧会開催後に、取り組みやビジョンを発信するトークイベント・特別講義を実施。
・「東アジア文化都市2023静岡県」の一環として、静岡県と連携し、中国人アーティストの滞在制作の受け入れと国際交流を行った。
・民間企業と連携し、掛川市に提案するアクションプランの一つとして、「アートのまちづくり　原泉」（「原泉アートパーク化構

想」）を掲げてもらい、掛川市長をはじめ市役所内の関係機関に発表した。

## 活動の効果

①海外アーティストの存在により、地域関係者の協力体制と活動への理解が深まった。また関係機関、海外アーティスト、当団体のそれぞれの発信が、地域やお互いにとってメリットになる連携となった。
②月一回、一般の方や関係者が集まる機会を創出。日常的にHARAIZUMI AIRと外部がつながる場となった。滞在アーティストによるトークやプロジェクトの研修発表会の他、哲学者を招いた哲学サロンなど、新しいテーマを設定することにより、これまでとは異なる層に興味を持ってもらえる機会となった。

## 活動の独自性

コロナ以降の海外アーティストの受け入れと、団体独自のネットワーク形成は、今後、過疎化が進む中山間地にありながら、地域におけるアート活動がグローバルに広がっていける可能性を秘めている。海外アーティストの存在によって、近隣アーティストにとっても学びの機会となっており、交流や新しい発見を求めて、より一層アーティストたちが集まる場が形成されると考えている。

## 総括

今後、地域全体として「原泉=アート表現・活動が日常にある地」を表現していくにあたり、「原泉アートパーク化構想」といったビジョンを、海外アーティストをはじめ、関係者、行政機関、大学、民間企業などに知っていただける機会をあらゆる手法で実現できたと言える。一方で、明確な枠組みを定めておらず、ビジョンを広く一般に発表するためには多くのリソースが不足しているなどの課題が見つかり、まさにプロセスの年となった。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | River to River　川のほとりのアートフェス2023 | | | | |
| 団体名 | ya-gins | | 実施期間 | 2023年10月21日 ～ 2023年11月13日 | |
| 代表者名 | 八木 隆行 | 活動地域（都道府県名） | 群馬県 | 詳細エリア | 前橋市中心市街地（前橋市千代田町、住吉町など） |

藤口諒太《養豚農場》Photo : Satoshi Mori

西島雄志《間 ahahi》（左、部分）、《双瑞雲 sou-zui-un》（中央）Photo : Satoshi Mori

拠点を運営するアーティストらによるトーク

## 活動の目的

コロナ禍からの地域の芸術文化活動やコミュニティの再興やアート関係者への支援、これまで前橋で行われてきた地域の人達とアートプロジェクトを通じて提示した問題や価値観を市民や街が継続的に支えること、前橋の歴史や文化の発信と活用、保存についての問題提起していくことを目的に、2021年より街を回遊しながら多様な作品を楽しむことができる「River to River川のほとりのアートフェス」を開催している。

## 活動の内容

前橋の中心市街地の歴史的建造物や文化芸術拠点6ヶ所に、前橋内外のアーティストを招聘して作品展示とグッズ販売を行った。
藤口諒太（会場：ｂ）は、前橋市の主要産業の一つである養豚を取材しサウンドインスタレーションと、協力企業の製品を使った特別ランチを会期中限定で提供し、五感に訴える作品となった。西島雄志（会場：旧安田銀行担保倉庫）は、作家が県外から群馬へ移住し、培ってきた関係性の中から生まれた大型の動物をモチーフとした彫刻3点を展開した。煉瓦造りの暗い空間の中で、静謐な雰囲気をもった空間は、リピーターも多く訪れていた。糸井潤（会場：広瀬川美術館）は、作家のキャリア初期から折に触れて撮り溜めていた様々な形態のセルフポートレート写真をレトロな空間で一堂に展示した。MOMIKO（会場：ya-gins）は、作家自身が出産後に変化する生活の中でドローイングを多数制作し、一堂に展開した。平井陽子（会場：旧磯部湯）は、2013年度にアーツ前橋のプロジェクトの一環で制作された壁画（作：幸田千依）から発想を広げ、営業を終えた銭湯の空間に仕掛けを施した。アーティストトークと、県内を中心に場を持ち活動しているアーティストらによるトークイベントも開催した。

## 参加作家、参加人数

参加作家：藤口諒太、西島雄志、糸井潤、MOMIKO、平井陽子、ほか小作品展には過去の参加作家も参加
来場者数：全会場の延べ人数 3477人
10/29 トークイベント「場をもつこと／ゆるやかな繋がり」45 人
11/4「アーティストトーク 糸井潤/ 西島雄志 」50 人

## 他機関との連携

開催3回目ということで、旧安田銀行担保倉庫では、他団体による地域ゆかり作家や川の歴史に関する連携展示が行われた。期間を合わせて新たなアートイベント「上毛芸術線」も開催され、オープニングイベントを共同実施し、作家や関係者同士の交流も行われた。
特別協賛： SOWA DELIGHT
協賛：一般社団法人 前橋まちなかエージェンシー
協力（五十音順）:アーツ前橋、アーツ前橋サポーター・グループ展 実行委員会、風と川のまち前橋史料館、神林興業株式会社、喫茶マルカ、近藤スワインポーク、上州文化ラボ、上毛芸術線実行委員会、白井屋ホテル株式会社、ハラサワコレクション、萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち、前橋文学館、b、広瀬川美術館、べえす、ニャムコム、NPO法人マエバシ・アート・プラクティス、まえばしガレリア、安田煉瓦市実行委員会、らくだスタジオ、re/noma maebashi

## 活動の効果

日常的に足を踏み入れることができない歴史的建造物に足を運んでもらい、前橋の歴史や文化、前橋ゆかりのアーティストの活動を、本事業を通して知っていただく機会になった。他団体による連携企画も行われ、地域の歴史や文化に対して多角的なアプローチで知っていただくことができた。トークイベントは、県内の美術関係者や活動に関心を持つ市民と意見交換と交流が行われた。
他のアートスペースで若い作家が同時期に展示を行うなど、若手作家の紹介や育成に繋がった。また本事業をきっかけに他県の作家が前橋や群馬に関心をもちmapや榛名湖AIRなどでの滞在制作行うことや、アーティストが行うプロジェクトの継続と発展に繋がった。

## 活動の独自性

ya-ginsとしてこれまで12年程、継続的に活動してきた事により、商店街や地域の中でも少しずつ認知され、協力してくれる人や団体も増えてきた。現在の前橋では過疎や文化の衰退が大きくクローズアップされることはなく、むしろ民間主導での街づくりが活性化している。大手ギャラリーも前橋へ進出してきており、アートや建築の街として注目を集めている。そうした外からの刺激や変化も受けつつも、これまでの身近な関係性の中で、それぞれが経済的な規模は小さくとも主体性をもってDIY的に行ってきた、前橋というローカルな場所で生み出すことによる多元的な意義と文脈、そこから繋がり広がっていくものを大事にしている。
よって、会場と作家や作品のマッチングは考慮した上で、キュレーションとして強い方向性やテーマはあえて示さず、作家に会場そのものがもつ歴史や雰囲気、地域性、「River to River」というタイトルなどから、作家がその時一番表現したいものを展示やイベントとして形にしている。そうしたゆるやかな枠組みゆえに、来場者や企画・主催している我々自身も、これまで気づかなかった会場や地域に対する新たな可能性や知見を得ることができている。

## 総括

これまでの活動を通した関係性を活かして、アートイベントだけでなく他の文化活動や食やマルシェなどのイベントと連携して様々な活動をつなげる事ができた。
現在の前橋は、「めぶく。」をスローガンに、行政や民間企業によるまちづくりが活性化していて、ディベロッパーによる街の開発やコマーシャルギャラリーの誘致が行われている。前橋にいながら都心で評価されたアートに触れられる機会が増えた一方で、これまでの経済的には規模の大きくない地域活動や場所を押し流して、他都市と均一化していく不安も抱いている。そうした状況の中で、地域に根ざした小さな場や活動、ささやかでも豊かな関係性を結び、紹介する事ができたことは、地域の良さを再発見する機会としても必要なものになったのではないだろうか。
群馬県内ではそれぞれの地域で様々なアートの取り組みが行われているが、桐生と前橋を結ぶ鉄道を用いた「上毛芸術線」と連携したり、中之条ビエンナーレや榛名湖AIRの作家を招聘する事により、作家同士だけでなくそれぞれに関心をもつ来場者や関係者とも関係性を生み、広げる事ができた。
今年度より様々なイベントも復活してきて、コロナ禍からの地域の芸術文化活動やコミュニティの再興や支援という当初の目的自体は、一定の成果がありつつも役割を終えたと感じている。今後は、過去3回の活動を振り返ってまとめ、本事業で得た成果や関係性を持続可能な形で更に展開させていきたい。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 北奥のF"UNKASAI | | | | |
| 団体名 | 株式会社風景屋 | | | 実施期間 | 2023年7月15日 ～ 2024年2月25日 |
| 代表者名 | 小林 徹平 | 活動地域（都道府県名） | 青森県 | 詳細エリア | 十和田市、秋田県鹿角郡小坂町 |

中山晃子氏によるアートピース

中山晃子氏による十和田湖の砂を扱った動画作品

吉勝制作所による雪凸版のプロトタイプ

## 活動の目的

十和田湖を、“観光地”ではなく大自然とともにある“文化醸成地”にする。
①十和田湖畔がこの土地らしく続いていくための自然と人間の在り方と上質な日常を考え続ける。
②日々の美しい自然に呼応するような、新しい視座をもたらすものとしてアートを挿入し、人々が新たに十和田湖の楽しみ方を発見できるような仕掛けを創り出す。

## 活動の内容

数年間の文化醸成において重要なのはリサーチの深さと表現方法の相関性なのではないかという仮説のもと、昨年度も参加いただいた中山晃子氏を招聘し、引き続き2年目の作品づくりに取り組んでいただいた。また、中山晃子氏がキュレーターの役割を果たし、「未来に託せそうな、その人の視線をとおして湖畔を感じてみたい」と思えるアーティストとして、山形県を拠点に活動するアーティスト・吉田勝信氏に参画いただいた。地域の素材を原料に変える彼らの作品はまた新しい視点を地域にもたらしている。
アート部門以外では、以前からの知人である講談師・田辺銀冶氏に十和田湖の歴史文化をリサーチの上、新たな創作講談を制作いただき、地域の方に披露いただいた。

## 参加作家、参加人数

中山晃子氏
吉勝制作所（吉田勝信、稲葉鮎子）
田辺銀冶（サポート　梁川剛）

## 他機関との連携

環境省十和田八幡平国立公園事務所

## 活動の効果

地域の人が、こんなことがあるのか、と驚くのが何よりも成果ではないかと思う。アーティストがもたらす専門家としての深い視座が、ここで暮らし、住んでいる人の視点を深くしていく様子が見てとれる。また、作家の制作途中から新たに新しい地域体験型のアクティビティが生まれそうである。ミッションである、文化醸成地として、アーティストが残した片鱗を地域が受け取り、形にし、もっというと商品化していく。そんなきっかけになる気配を感じる2点目だった。また、中山晃子氏の2年目の作品は十和田市現代美術館の館長の鷲田さんの言葉を借りると「より深く、でもわかりやすくなった」という評価を頂いている。同様なコメントを作品を見た方々にも言われているが、「でも不思議」という、何か心に残るようなきっかけになっていると感じる。

## 活動の独自性

十和田湖にしかない素材を利用し、十和田湖で表現し、外の人よりも地域の人がその作品に感動する視点・視座をいただいた。また、今年はF"UNKASAIとしては、例年通りとわだこマルシェや、食事のイベントも実施している。景勝地として名高い十和田湖ではあるが、一方で人口200人、かつ集落の3割が廃屋である。ただ、F"UNKASAIを通して、十和田湖を体感する人は軒並み、「十和田湖の良さ」の一端に触れて帰る、そんな時間になっている。

## 総括

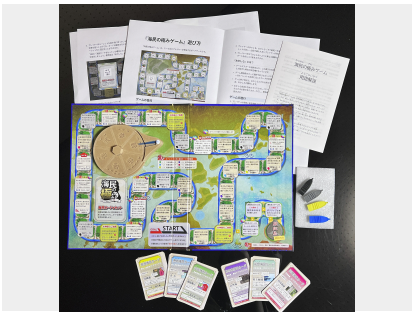
2年目ということもあり、今年は1年目のアーティストさんの作品も非常に興味深いものになり、また、二人目のリレー形式のアーティストさんの作品はランドアートへの走りとしてのプロトタイプが生まれている。今後も小さいながらも、続けていきたいと思えるF"UNKASAIの2年目だった。

公益財団法人 福武財団

# 地域振興助成
# 2023年度瀬戸内海地域振興助成
# 成果報告書

Fukutake Foundation

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 芸予諸島とその周辺地域に内在する文化資産の発見と定着を目指すボードゲーム実装プロジェクト | | | | |
| 団体名 | エトセト・ラボ | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 | |
| 代表者名 | 前田 陽子 | 活動地域（都道府県名） | 広島県 | 詳細エリア | 愛媛県　芸予諸島とその周辺の海岸地域 |



ボードゲーム成果物

提携先視察１

提携先視察２

## 活動の目的

エトセトラボは、京都芸術大学通信教育部の学際デザイン研究領域に所属するグループで、2021年度の修士研究の成果物として発表した芸予諸島地域のボードゲームついて現物化し、地元の方々に実際に配布することを目的に発足しました。

## 活動の経過

修士研究で制作したボードゲームは、研究発表での使用のみで廃棄されていたため、助成金を使って現物化して地域の方に実際に配ろうとしたのが経緯です。

## 活動の成果

ご当地ゲームの作成、配布を足掛かりとし、芸予諸島の歴史や文化に対する地域住民の理解を深める効果を期待しました。ボードゲームの内容について、充分にデザインや仕様の検討を進めることが出来ました。実際に現地の協力者にお会いして協力を取り付けることが出来ました。まずは数ヶ所ではありますが、学習塾、ご家庭などに配布することが出来ました。

## 活動の課題

配布活動が途中なので、引き続き進めてまいりたいと考えています。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 香川初！次世代に繋ぐ地域活性型伝統芸能継承事業 | | | | |
| 団体名 | 十獅会 | | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 |
| 代表者名 | 谷口 佳広 | 活動地域（都道府県名） | 香川県 | 詳細エリア | 高松市十川東町・十川西町・亀田南町・小村町を合わせて、十河地区 |

秋季例大祭：親子獅子・小学生獅子　奉納演舞

へんど（家遣い）　獅子舞演舞

香り活動：小学3年生　地域連携授業

## 活動の目的

十獅会は、十河獅子連合会といい、十河地区（高松市十川東町、十川西町、亀田南町、小村町の4住所地域）の鰹宇神社の氏子である18自治会を基にした、獅子を有する8団体の有志により結成される団体です。
自分たちの生まれ育った町に愛着を持ち大人になっても住み続けたいと思えるものを、獅子舞を通して地域コミュニティの活性化につなげていきたい想いで活動しております。
【100年後に十河の獅子を残す】
•既存獅子の活性化並びに持続可能な体制づくりを行うこと
•十河の住民なら誰でも参加できる獅子を確立すること
•鰹宇神社の賑わいをつくりだすこと
•伝統芸能である獅子舞の存続方法を域外へ発信させること
を活動理念とし、地区内の地縁的な住民の繋がりの強化、子どもの成長に合わせた経験•学習の場の提供、地域の伝統文化である神社の活動の維持•発展を柱とした社会貢献に資するという目的を、子どもから大人まで団体の趣旨に賛同する者を募り、協同し自治会を越えて広域的に活動を行うことで、達成するものと考えております。
また、前年度に続き８つの獅子団体の楽曲を繋いで作成したオリジナルの演舞を行い、全員で創り上げる機会を、獅子教室として主軸におき、令和５年度において、
獅子舞教室の目標としては、
「ENJOY•CHALLENGE•HIGHQUALITY」の目標を掲げました。これには、
•獅子舞へ参加する上で、練習や獅子舞そのものが楽しいことを前提に掲げ、コロナが開けての初年度になるため、全力で活動していく意気込みも込めてENJOYとする。
•子どもたちが自主的にまた意欲的に活動していく教室運営をしていきたい思いから、CHALLENGEとする。
•初挑戦となる家遣い（個人宅や企業を訪問し演舞を行う）を行っていく活動計画を見据え、昨年度の『自分の所属する獅子団体以外のパートで演舞を行い、１曲成立させる』という大人の目標を１歩先のHIGHQUALITYへ進めていくものとする。
という意図を込めました。
これは、令和５年度における十獅会全体目標である
【獅子組としての本格始動！個の力を集結し前進あるのみ！！】
大人•子どもの道具（頭•油単）購入の目途がたち、獅子を基本とした活動に移行して、獅子での活動を収入源として運営をしていく準備期間とし、個人個人が成長し組織強化につなげることに通じるものです。

## 活動の経過

１ 獅子舞教室（４月～１０月）
前年度に引き続き、大人も子どもも楽しんで、新たなことに挑戦し、演舞の質を高めるよう協力して運営を行いました。新規のメンバーが３組増えました。
２ 鰹宇神社秋季例大祭での十獅会での獅子の奉納（１０月）
祭りグループの小学生•子獅子•親獅子を縦に三連に並び、十獅会のオリジナル曲にて奉納演舞を行いました。学校の協力もあり、 市の広報誌の特集•報道に掲載されました。
３ 小学校香り活動祭りグループへの協力（５月～２月）
小学3年生を対象に、地域の連携授業の実施。子どもたちに、どうすればお祭り•獅子が活性化するかの議題を一緒に検討し、小学生が作成したポスターを校内や各自治会集会•企業に掲示する予定です。
４ 十獅祭（地域で十獅会が主催するイベント）（１０月）
スーパーに協力を頂き、各獅子連を順番に演舞することにより、獅子イベントを開催。今年は、和太鼓とのコラボを行い、イベントを盛り上げました。
５ 家遣いの初の実施（１０月）

企業•個人宅に７件お伺いして、親子獅子の演舞を披露しました。大人•子ども双方にて演舞を完成させ、特色のある獅子が形つく られました。
６ 海ごみ活動への参加（５月）
さぬき市津田町にて、県が主催する海ごみ（クリーン）活動を行いました。環境への学びが大人も子どもも活動を通じて深まりました。
７ その他活動
注連縄取付け（９月）、ＢＢＱレクリエーション（１１月）、注連縄飾り作成のワークショップ（１１月）

## 活動の成果

令和５年度の成果は、大きく２点あります。
１点目は、十獅子会の獅子の礎ができたことです。
コロナ禍明けの秋祭りで、大勢の参加者関係者を巻き込んだオリジナルの演舞を成功させることができ、地域の特色ある秋季例大祭を盛り上げることができ、家遣いを初の試みとして行い、大人子ども共に親子で演舞を行い、教室での練習の成果を十分に発揮出来ました。また、小学校の祭りグループの活動についても１年を通じて充実した内容で実施でき、神社での演舞に加え、発表会でも成果をあげることができました。獅子舞教室でも、参加する子どもの新規獲得に成功し、活動を継続して行う子ども達の技術の向上においても一定の成果をあげることができました。
以上のように、獅子の演舞という主となる活動については、大きく成功しました。
２点目は会の組織体制の強化を行った点です。
会のメンバーの１人１人について役割分担を行い、会長・副会長・会計の３役及び企画運営、教室練習・イベント・学校サポート・補助金・道具管理・広報と班体制を作りました。特に広報には力を入れて、ＳＮＳでの発信、学校・協力店舗へのチラシの配布を行いました。これにより、メンバーの意思統一を図り、組織の強化を実現することができ、一層活動に力を入れやすい環境が整いました。

## 活動の課題

今後、令和６年度に継続しての課題は２点あります。
１点目は、道具の調達です。今回の補助により、子獅子の頭の調達ができましたが、その他獅子の油単等の道具費用の捻出が自団体での会費を中心とした積み立てに依存しており、維持管理を含めた運営をどのように実施していくかという点
については今後課題となっています。
２点目は、活動の目的の根幹を占める地元の氏神である鰹宇神社での地域全体での秋季例大祭の実施が、各自治会単位の持ち回りによる運営が主体となっており、各自治会の高齢化や人数の減少によって現行の形態での運営が非常に困難になっている点です。活動から離れる自治会が発生しており、今後将来にわたっての持続をどのように行うかというのが喫緊の課題となっています。
十獅会としては、獅子の演舞自体の完成度を高めることはもとより、本格的な道具を用いて、香川の伝統芸能として域外へ発信していく活動が具体的に行える環境と活動体制が整いました。地域全体が同じ目的意識をもち、神社での活動運営についても持続できるよう前進していこうと考えています。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 男木島の納屋をオフグリッドと循環を学ぶ 宿泊施設兼島の交流スペースとして改修し、唯一の寺「道場」を介したコミュニティの再生プロジェクト | | | | |
| 団体名 | 明治大学地域デザイン（川島範久）研究室 | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 | | |
| 代表者名 | 佐藤 壮真 | 活動地域（都道府県名） | 香川県 | 詳細エリア | 高松市男木町 |

高松市の製材所・材木店で発生した廃材を用いて、納屋の構造補強を完了させた。

三和土施工のワークショップを開催し、島民の方々と一緒に左官を行った。

祭りの稽古から片付けまで参加し、島の文化を学びながら島民の方々との関係性を深めた。

## 活動の目的

島内の檀家の減少の中で管理者である畠中夫妻がご高齢であることにより男木島唯一の寺「道場」の維持管理が難しくなっている。そこで本プロジェクトでは、島の交流スペースとして「道場」を共同で維持管理を行う方法を考え、畠中夫妻をはじめとした島民の方々との繋がりを増やしながら、新たなコミュニティの創生を行っていくことを最大の目的としている。それにより、島民の高齢化や移住者増加の中で失われつつある男木島の歴史や文化の継承も図っていきたい。現在はその第一歩として、「道場」に隣接する納屋を、「オフグリッドと循環を学ぶ宿泊施設兼交流スペース」に改修している。納屋のオフグリッドな計画が、今後の島での暮らしを考えるきっかけを生むことや、島ならではの魅力や学びを提供すること、大学のサテライトゼミや企業の研修の場として使用されアカデミックな繋がりを生む場として機能し、関係人口を創出することを目的としている。

## 活動の経過

2023年度は男木島への合宿を5回行い、島民の方々と交流しながら納屋の改修を進め、構造補強や三和土土間を施工した。各合宿では、施工やテントサウナ体験のワークショップや食事会を開催したり、体育館開放や自治会の清掃、祭りの準備片付け等に参加したりすることで、島民の方々との関係性を深めた。大学では納屋の詳細設計に加えて、構造研や設備研との共同研究として構造補強の計画やオフグリッドな暖房・給湯設備のモックアップ作成と検証を行った。関係人口の創出を目的として、東京都世田谷区用賀での活動発表や渋谷区青山での展覧会にて展示を行い、男木島の魅力や活動内容を発信した。また、学生3名が男木島をフィールドとして修士論文を執筆し、大学院修士過程を修了した。現在も継続して学生5名が研究を行っている。

## 活動の成果

納屋改修における構造補強の実践と研究の過程で高松市内の製材所・材木店の方々とのネットワークの増強や製材の過程で発生する廃材の新たな活用方法の模索を図ることが出来た。現地でのワークショップとして三和土土間の施工を行ったことで、男木島の若い移住者を中心とした方々に参加していただき、関係性を構築するのみならず、移住者の方々が他の空き家で改修や生活を行っていく際に参考となる知見を共有することが出来た。食事会の開催や島内イベントへの参加においても、島内の関係性を構築するのみならず、島内の文化や歴史、コミュニティの在り方への理解を深めた。東京都世田谷区用賀や展覧会での活動発表では多くの方々に集まっていただき、関係人口や移住者の創出の足がかりを形成することが出来た。これらの活動が本年度修了した学生3名の研究へと繋がり、本年度は製材所・材木店から発生する廃材に関する研究、島内の廃棄物等を活用した断熱材に関する研究、移住者とコミュニティに関する研究が行われ、そこでの知見を島民の方々に共有した。

## 活動の課題

2022年から活動しており、若い移住者を中心に島民の方々やコミュニティと関係性を構築することができたが、当団体が開催するワークショップや食事会に参加していただいているメンバーが固定化されつつある点が課題である。自治会の清掃や祭りへの参加を通して、高齢者層ともある程度の交流はできているものの、当団体の活動には呼び込めていない。新たなコミュニティの創生に向けて、開催するイベントの内容や告知方法を工夫することで、新規参加へのハードルを下げることが不可欠である。継続して納屋を完成させて運営することを目標とし、卒業生が中心となって設立するNPOによって実験的に納屋を運営し、事業計画や体制を見直していく。納屋の改修や運営によって交流や関係人口を創出し、「道場」の活用方法を島民の方と話し合いながら考え、建物としても文化としても残していきたいと考えている。これまでの活動を通した研究が島民の方々や他の活動へと還元され、アカデミックな島になるよう、活動を推進したい。今後、本プロジェクトのみならず、島内外での活動にそれらの知見が活きることを期待している。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | TOMO発信！海洋プロジェクト | | | | |
| 団体名 | 福山市立鞆の浦学園 | | | 実施期間 | 2022年12月1日 ～ 2023年3月10日 |
| 代表者名 | 友瀧 佳司之 | 活動地域（都道府県名） | 広島県 | 詳細エリア | 福山市鞆町 |

活動についての話し合い

ラーメン試作・改良

鞆軽トラ市販売のブース

## 活動の目的

特別支援学級に在籍している児童生徒が，自立活動の学習の一環として「TOMO発信！海洋プロジェクト」を立ち上げ，学習を進めている。目的は主に２つある。
①地元の海で失われつつある産業の保全やSDGsの観点から，児童生徒が主体的に様々な取り組みを考え実践を行っていくことで，海の豊かさを守り，将来的な発展継続に寄与していくこと。
②学習活動全体を通して，他者と協同する力，コミュニケーション能力，郷土愛などの育成，向上を図り，心身の調和的発達を促すこと。

## 活動の経過

活動の経過は，次の５点に分けられる。
①鞆の浦漁業協同組合との連携
　実際にわかめの植え付け，刈り取り体験をさせてもらい，その中で「わかめオーナー制度」などで産業の保全についての取り組みを知るきっかけとなった。
②課題発見，改善に向けての取り組み
③（有）クラタ食品や外部講師との連携
　児童生徒達が「自分たちにも何かできることはないだろうか」「わかめを使った製品（ラーメン）を作って活動をPRできないだろうか」と考え，その実現に向けて活動を開始し，児童生徒の思いに賛同して下さった地元企業に協力を仰ぎながら「わかめラーメン」を完成させた。児童生徒は試作の段階から関わり，わかめの乾燥や粉末化，パッケージのデザイン考案など，できる範囲で協力していった。
④販売に向けてのPR活動，販売
　地元で開催されている「鞆軽トラ市」で販売することになり，児童生徒はPRのためにポスターを作って地元の施設を回るなどした。「鞆軽トラ市」での販売も実際に児童使徒が主体的に行い，PR効果もあり予定していた食数を完売することができた。
⑤活動の振り返り，まとめ，次年度に向けて
　効果として表れているのかを自分たちで分析し，成果と改善点をまとめた。そこから次年度に向けてどのように継続，発展させていくかを話し合った。

## 活動の成果

・鞆の浦漁業協同組合，（有）クラタ食品と連携した本活動の様子や，ラーメン販売に向けて準備の様子が，中国新聞，山陽新聞で紹介された。本活動や，本活動をはじめるきっかけとなった漁業協同組合の産業保全に対する取り組みなどを広く知ってもらうきっかけとなった。ラーメン販売を行った際も，新聞記事を見て活動に興味をもち，ラーメンを購入しに来て下さった方もいた。
・「鞆軽トラ市」でラーメン販売を行った際のアンケート調査によると，購入者の51,3%が鞆町以外（福山市他地域,広島県内,愛媛県）の人だった。地元の人以外にも印象を与えるきっかけとなった。
・児童生徒は,学習の過程で「もう一度,地元の海のことを知りたい」ということから,香川大学長谷川教授を講師として招き講義を聞いたり,ラーメン販売をPRするポスター制作の際,プロのデザイナーに効果的なポスターの書き方を指導してもらったりするなど,いろいろな方と触れ合い,知識や学習を深めることができた。
・「鞆軽トラ市」では,児童生徒も実際に店頭に立ち,金額の受け渡しや計算,お客の呼び込み,購入者へのお礼など,学校で学んでいることを実践的に生かす場とすることができた。
・児童生徒に学習後に行ったアンケート結果によると「鞆のわかめのよさをいろんな人に広めることができた」「友達と話し合いながら学習を進めることができた」「ラーメン販売や活動を通して,色々な人と関わることができた」がいずれも肯定的評価85%以上

だった。学習目的であった「他者と協同する力」「コミュニケーション能力」の育成につなげていくことができた。

## 活動の課題

・活動を継続していくにあたり,「ラーメンを販売すること」が目的とならないように,児童生徒の思考に沿いながら,この活動を通して何を学ぶか,どういう教育的効果が得られるかを意識し,心身の調和的発達につなげていきたい。
・今年は,販売が鞆軽トラ市のみだったが,より多くの人,他地域の人に知ってもらうため,今後は販売する場所や機会の拡充を狙っている。ラーメン自体も,よりわかめの風味を感じられるものにするなど,製品自体もレベルアップして販売を継続していきたい。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 福山市鞆町における江戸期町家の畳空間を活かした創造的再利用 | | | | |
| 団体名 | 備後表継承会 | | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 |
| 代表者名 | 佐藤 圭一 | 活動地域（都道府県名） | 広島県 | 詳細エリア | 福山市鞆町（重要伝統的建造物群保存地区） |

事業対象の鞆町の江戸期町家（6月イベント時）

備後柿渋塗りワークショップ（町家玄関部分）

地元左官さん指導による土壁塗りワークショップ

## 活動の目的

本会は、畳を日本建築文化の核心と捉え、イグサによる畳文化の継承を大きな目的とし、備後地域発祥の中継表の技術継承も含め、備後藺表（備後地域産イグサを原料とした備後表）を地域協働で後世へ継承することを目的とし、様々な取り組みをしている。
今回事業対象とする町家（主屋と蔵）は江戸期創建の建築で、福山市鞆町重伝建内の伝統的建造物にそれぞれ特定されている。この２棟を借り受けて、2022年７月本会鞆事務所を開設した。この町家を必要最小限に改修しながら数年間維持・活用することで、将来の大規模修理を伴う事業計画に繋げることが大きな目標である。空家状態が続いて老朽化が激しかったが、使い続けることが建築保全継承の最も有効な手段と考え、地域伝統のイグサや備後藺表を介在させることで町家再利用を促進する。

## 活動の経過

借り受けから1年間以上、町家の掃除・片づけを継続し、活動拠点整備を行ってきた。同時に、本事業着手前から建築調査・実測を行い、配置図、平面図、断面図、展開図等を作成した。福山大学建築学科の学生の協力で、いくつかの再利用計画案も提示された。
本事業助成の中心となったのは、当該町家と備後藺表への一般の関心を深めるために行った、古民家リノベワークショップ（以下、WS）を含む２期間のイベントである。第１弾は６月23～25日の３日間「備後柿渋塗り＆イグサハット製作実演」と題して開催した。町家を会場に、WSや実演、町家見学会と共に、イグサ・備後藺表や柿渋関連商品の展示・販売も実施した。また本会会員が試作した「イグサペレット」のお披露目もこの場で行った。第２弾として、９月22～24日の３日間「イグサ土壁塗り＆古民家見学・再利用相談会」を開催した。地元の左官さんに指導いただき、一般向けに土壁塗りWSを実施した。イグサを装飾や繋ぎ材として壁土に混ぜる試みも行った。同時に、イグサにより広く関心をもってもらうため、バリスタと協働で創作した「イグサクリームソーダ」の販売も行った。その他、畳のある町家空間を利用して、建築家による空家「再利用」相談会も開催した。
これらのメインイベント期間の他にも、随時町家を開放して、「生きている町家」見学会を実施した。11月28日には、「畳製作」の選定保存技術保存団体である「文化財畳技術保存会」の視察・研修会場としても活用し、備後藺表の課題についても議論した。

## 活動の成果

掃除・片づけという基本的な建築維持活動や見学会を実施しつつ、事業年度を通じて建築調査・実測と図面作成を行った。詳細図まで作成できていないが、寸法把握の基礎調査は事業年度内に終え、今後の町家再利用に有益な基礎資料を作成することができた。
「畳は畳としてあるのではなく、建築化されてその真価を発揮する」というのが本事業の根底にある考えである。様々な一般参加型の事業を通じて、地域に残る希少な備後藺表の継承と町家再利用の双方の意義について、地域や一般の方々、職人や専門家と本会で共有した。本会の目指す備後藺表の普及啓発と同時に、町家再利用の取り組みを通じて鞆地域の魅力を発信することの一助にもなった。地元の特産品である備後藺表や備後柿渋を介在させることで、広く地域や地元大学を巻き込み、日常的な関係人口の増加を図ることもできた。本事業を機に、鞆町だけでなく他地域でも、備後藺表を活用した古民家再利用にも広がりをみせた。また、リノベWSで使用した備後柿渋についても、希少な伝統建材として備後藺表と共に焦点をあてることで相乗効果をうみ、備後地域における町家再利用の新たな可能性も示せた。これらの成果は、地元新聞にも大きく取り上げていただき、日本建築学会でも紹介した。

## 活動の課題

当初は３年間続けての本事業申請によって、対象町家再利用を軌道にのせる計画であったが、１年目の多岐にわたる活動とその成果を総括する必要もあり、継続申請は断念した。一方、１年間の活動で想定以上に成果が膨らんだ点も多々あり、改めて、所有者や関係者と町家再利用方法を協議したい。本事業再申請も視野に、引き続き、備後藺表を活かした町家の創造的再利用を目指す。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 狛犬から直島の江戸時代を見てみよう 狛犬パネル写真展&探訪会＆講師講演会 | | | | |
| 団体名 | 小豆島狛犬探究会 | | 実施期間 | 2023年4月2日 ～ 2024年2月25日 | |
| 代表者名 | 山西 輝美 | 活動地域（都道府県名） | 香川県 | 詳細エリア | 小豆島、令和2年度高松市庵治町牟礼町、令和3年度丸亀市広島町、令和5年度香川郡直島町予定 |

直島狛犬パネル写真展(直島町総合福祉センター)

直島狛犬探訪会で藤原好二氏の解説

狛犬講師講演会(磯辺ゆう氏)

## 活動の目的

狛犬は、表情があり子供から大人までが馴染める石造物である。そのフォルムから出身地や奉納年代が推定できる石造物でもある。その特徴を活かして狛犬からその地域の歴史を推し量り、それを地域の魅力のひとつとして価値を再発見してもらい、大事に継承してもらう一翼を担う。身近にある氏神様の狛犬を調査することから分かる、瀬戸内の島々からみた直島の昔の様子を地元の人にお知らせする。

## 活動の経過

•令和5年4月から調査、撮影。
•8月27日に子ども対象の探訪会「こまいぬさんぽ」開催。直島内の親子3組。暑い時期でもあり、外歩きのあとは、屋内にて狛犬の絵を描いてもらった。
•9月10.11日、講演会予定講師の先生と調査、研修会をした。講師の方の視点は広く、いろいろな情報が得られた。
•11月5日、一般の方向けの探訪会を開催。島内外の20余名参加。
令和6年、年明けから、パネル展の準備。2月10日に展示準備。11日から13日間パネル写真展を開催した。
•11日は、長谷川修一氏「瀬戸内海と直島の成り立ちを知ろう」講演会をした。当初の予定にはなかったが、住民の方の要望により実施した。
•18日、子ども用のこまいぬハリコお面作りをした。有料だったこともあり、参加者が少なかった。
•25日講演会二件。磯辺ゆう氏の「直島護王神社狛犬から見えてくる浪花狛犬の世界、特に蝦蟇型について」。杉本厚典氏「近世大坂の石屋分布と廻船」。講演会後、展示の撤収。

## 活動の成果

11カ月の間、直島へ通った。6回のイベントをした。徐々に住民の方と知り合いになり、いろいろな情報をいただき、最終イベントのパネル写真展にたどり着いたという感じである。探訪会はアンケートの結果、23名中23名が直島の江戸時代に興味を持ったとの回答でした。島外参加者からも大変好評でした。パネル展では「江戸時代を見てみる」という点ではもう少し工夫があってもよかった。しかしながら、住民の方には「狛犬を今までじっくり見たことがなかった。」と、パネル写真をじっくり眺めて、解説文を読み、瀬戸内の島々にも直島同様に江戸時代の狛犬がたくさんあることを知ってもらい、廻船業の盛んだった直島の江戸時代に思いを馳せてもらえた。子ども達には、狛犬を見に行き絵に描き、狛犬が２００才くらいの古いものであること、大人達が大事にしてきたことを感じてもらえた。住民に対して、江戸時代の知識を補完したのは、４人の講師講演会だった。それぞれ違った角度からの講演内容で、直島の新しい魅力の再発見になった。「知らないことばかりで、興味深かった。」という感じのアンケート回答が多かった。地域の歴史に関心の高い方々が多く参加してくださったので、これからのイベント等に何かしらのヒントになったと思う。直島町の教育委員会担当者さんより狛犬のパネル写真を地域の文化展の時に借りられないかと言ってもらった。新しい住民の多い島、狛犬写真がたくさんの人の目に触れ、地域の歴史に関心を持ってもらうきっかけとなり、語られることを望みます。来場者は、推定で約１３０名。護王神社の狛犬の奉納年から、町史にあった嘉永２年ごろに船舶の数が増える手がかりが見られるかと思ったが、わからなかった。当初磯辺ゆう氏から護王神社の狛犬制作石工は和泉屋五郎兵衛という見解だったが、詳細な調査のうちに確定はできないということにいたった。杉本氏が講演の中で紹介した三宅家文書からの船積み荷の話は 、地元の方にとっても身近な話だった。論文化されても一般の住民の目に触れることが少ない史実を講演会を通して住民の方に知ってもらうのも活動の一つだと再認識した。

## 活動の課題

狛犬から地域の昔を見るのはパネル写真展という形ですると、非常に興味深く見てもらえる。繰り返しパネル展を行うといろいろと情報がもたらされる。住民の間でも忘れていた昔の話が話題として会話にのぼり、地域の歴史を掘り起こし、語り繋いでいける。製本という形で残せば、広く見てもらうことができるが、目的としては、狛犬のある地域の方に知ってもらうことなので、パネル写真展が望ましい。製本と両方したいのだが、会員の高齢化等いろいろな面で難しい。瀬戸内の島、讃岐の狛犬全体の傾向のまとめができたら良い。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 大濱奴と西浜子奴・神楽太鼓 の復活と次世代への継承 | | | | |
| 団体名 | 日新コミュニティ協議会・日祭会(日新地区の祭りを考える会) | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 | | |
| 代表者名 | 谷井 英二 | 活動地域（都道府県名） | 香川県 | 詳細エリア | 高松市日新地区(浜ノ町・瀬戸内町・扇町・新北町) |

2023年10月22日石清尾八幡宮秋季例大祭。18～35歳までの若手39名が新規メンバーに

13年振りの西浜子奴の登場に地元も大喜び。小学1年～6年生まで18名が集まり、練習の成果を披露

年長～小・中学生、78歳の大人まで総勢38名。5月～毎週金曜練習。今後も太鼓集団として飛躍

## 活動の目的

江戸時代、松平の殿様が参勤交代の際、護衛用に市内7ケ町に授けたものの内で、一番大きく重たい奴が「大濱奴」(1本約40kg)。近年は、高松の氏神様である石清尾八幡宮例大祭に奉納されていた。その歴史と伝統、文化を継承し、街に“賑わい”と“誇り”を取り戻すことが活動の目的。
今、消えかかろうとしている「大濱奴」の伝統を「日祭会」(日新コミュニティ協議会・日新の祭りを考える会)が中心となり、成人男性が担い手の「大濱奴」の再生だけでなく、2010年、日新小学校閉校と共に途絶えた、子どもが主役の「西浜子奴」、子どもから大人まで参画できる太鼓集団「日新太鼓」を編成することで、“復活・再生・新生”を目指す。担い手はもちろん。地域住民・地域外・世代を超えてアピール。“祭りごと”“ハレの日の行事”を通して、日新地区住民に地域の誇り・自慢を再認識してもらい、活動の輪を広げることで地元愛を育てる。

## 活動の経過

2023年
4月1日(土)　　大濱奴・日新太鼓メンバー募集
4月20日(木)　日新コミュニティセンター2階小会議室毎月第3木曜19時～20時・日祭会打ち合わせ
5月12日(金)～　日新コミュニティセンター３階ホール・毎週金曜17時30分～21時(幼児、小・中学生、高校生以上大人の部、各1時間。日新太鼓練習始動
7月1日(土)～10月14日(土)18時～19時(旧)日新小学校グランド　　大濱奴と西浜子奴練習
8月20日(日)　新北公園・「新北町夏祭り」にて日新太鼓演奏
8月27日(日)　(旧)日新小学校グランド・「日新地区ふれあい夏祭り」にて大濱奴の披露と日新太鼓演奏
10月1日(日)　(旧)日新小学校体育館・「落語寄席＆デリバリーアーツ2023～和・心・響・感～」にて讃岐国分寺太鼓と日新太鼓がコラボ演奏
10月22日(日)　石清尾八幡宮秋季例大祭・大濱奴と西浜子奴の披露と日新太鼓演奏
11月6日(土)　新番丁小学校体育館・新番丁小学校PTA祭りにて日新太鼓演奏
2024年
3月31日(日) JR高松駅前広場2と玉藻公園桜御門前の2会場(JR高松駅前広場2はサンポートFACTプロジェクト社会実験2023を利用)・大濱奴の披露と日新太鼓の演奏

## 活動の成果

2020年4月、20年以上途絶えていた「大濱奴」の復活を目指し、「日新地区の祭りを考える会」を有志で設立するが、振り手不足の為2017年～活動休止。2023年春、福武財団の助成採択されたことを機に、18歳～35歳までの若手39名が振り手のメンバーとして新しく加わった。
2010年～休止となった「西浜子奴」も地域住民と高松市民へのアプローチにより、18名が参加。
「日新太鼓」は、人員的に毎月、変動するものの2024年3月末現在、幼児7人、小・中学生10人、高校生以上大人15名がメンバーとなり、県下最大人員の太鼓集団に。
「大濱奴」は、これまで石清尾八幡宮秋季例大祭へ参加するだけだったが、「西浜子奴」と鳴り物の「日新太鼓」が加わることで、地域外にも活動の幅が広がった。
年度の最後に実施した、サンポートエリアでの「大濱奴」と「日新太鼓」の披露は、高松市の「サンポートFACTプロジェクト社会実験2023」に参加することで、サンポートエリアの賑わい作りと日新地区のイメージアップにも繋がった。

## 活動の課題

引き続き取り組むべき課題としては、①後継者育成②指導者の育成と技の伝承③大濱奴。西浜子奴・日新太鼓の魅力PR③石清尾八幡秋季例大祭だけに留まらず、地域・地域外でのイベントに参加し、場当たり的なイベント開催から次世代に継承できる仕組みと継続性のある運営の構築。
住民同士の繋がり、高齢者への敬いが希薄化する社会で、「大濱奴」を復活・再生させたことで、高齢者や地域住民と交流のなかった人たちの間で会話が生まれ、活気ある街になる。各々が日新固有の魅力を認識し、自分ができること、協力・支援することで、新たな動きを作ることが、今後の課題。顔の見える共助の仕組みと、“地縁”を生かした地域コミュニティを再構築し、次世代が育つ街づくりを目指す。
祭り、ハレ事は、コミュニティを維持するツールにはなるが、次世代に引き継ぐことが最大のカギとなる為、10年計画で活動を継続し、参加意識向上とファン構築を目指す。その一つが、石清尾八幡宮例大祭再興のために、高松市中央商店街、東浜、日新地区(日祭会)を中心とした「ふるさと御祭り実行委員会」を設立し、“人と人”“人と地域”“地域と地域”をつなぐ活動を推進し、旧市内に新しい豊かさを作り出す。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 小林和作旧居を軸とした地域の再生と記憶の継承 | | | | |
| 団体名 | NPO法人尾道空き家再生プロジェクト | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 | | |
| 代表者名 | 豊田 雅子 | 活動地域（都道府県名） | 広島県 | 詳細エリア | 尾道市旧市街 |

尾道建築塾では尾道旧市街西側エリアの失われた建築を解説付きで見学して回った

韓国人アーティストの小林和作旧居における滞在制作の成果報告会

第3回和作ウィーク時に開催した瓦全房における小野鐵之助展

## 活動の目的

2024年の小林和作没後50周年を前に、小林和作旧居を改修し、和作研究会の継続開催と実験的な仮活用を行うことで、新たな地域の文化活動・交流・研究拠点としての整備と方向性の確定を行う。旧小野産婦人科では、建物裏のギャラリースペース「瓦全房」の調査・整備を進め、小野鐵之助関連のアーカイブ展示を開催するなど具体的活用を行うことで、今後の文化の発信拠点の一つとしての活動を開始する。また、小林和作旧居の解体ストップと活用の模索を起点にスタートした「瀬戸際建築保全事業」を開始し、失われようとしている建物を保全すると同時に、尾道旧市街界隈の文化的記憶の風化に抗い、次世代への継承をハード・ソフトの両輪で推進する。

## 活動の経過

年度を通じて和作研究会を実施し、和作旧居、瓦全房の整備・資料整理を行った。建築塾を２回開催。再生された旧小野産婦人科医など尾道旧市街の近代建築を学ぶ「近代建築編」（5/21）と6月建築塾２尾道旧市街西側の失われた建築をめぐる「失建築編」を実施（6/25）。旧小野産婦人科医院ではオノツテのタイル貼りワークショップを開催（6/21）。和作旧居の仮活用の一環として、5月には国内アーティスト(5/16~5/30)を6月には韓国人アーティスト・キュレーターを招聘し(6/2~6/20)滞在制作を実施。活動報告のトークイベント（各5/29、6/19）も行った。関連して小野鐵之助を知る関係者ヒアリングも実施。7月には小林和作旧居の腐朽箇所の解体と再生作業開始し、今後の活用に向けての大規模整備を行った。8月には地域の小学生と高校生を対象とした絵画教室を開催（8/1,2,3）。11月には第3回和作ウィークを開催（11/3,4,5,11,12）し、和作旧居では森谷南人子展を、瓦全房では小野鐵之助展を開催、高橋家でも横谷奈歩のインスタレーションを公開した。関連してゲスト講師によるレクチャーとツアー、地域の大学の茶道部と連携してお茶会も開催した。11月から12月にかけてイギリス人作家の滞在制作を実施し、交流会も開催した（11/15~12/1）。その後台所の大改修工事の準備を行った。

## 活動の成果

和作研究会で、資料整理を行うと同時に、展覧会やイベントの構想や準備、裏庭整備などを推進することができた。和作旧居では多彩な仮活用企画を実施し、国内外のアーティストによる滞在制作と活動成果発表を行ってもらったことで、今後の和作旧居の活用法の具体化や施設の改善点も発見でき、今後の活動の計画立案に役立った。絵画教室企画も盛況で、地域の小学生や高校生との交流を図ることができ、有意義であったので毎年の恒例企画として実施する計画である。
旧小野産婦人科裏の瓦全房を整備し、残されていた小野鐵之助関連の遺留品を調査し、その成果を瓦全房で展示することができた。この展示を皮切りに瓦全房を新たな地域の文化発信拠点とすることができた。
第３回和作ウィークでは、小林和作周辺の人物に焦点を当てた展覧会、トーク、ツアー、大学と連携した茶会によって多くの来訪者（373人）を迎えることができた。数多くの異なる世代の来訪者や、和作の出生地である山口県秋穂からのゲストも迎えることができた。
改修工事により小林和作旧居の今後の活用につながるハード面での準備が大幅に進んだのも大きな成果であった。

## 活動の課題

2024年は画家・小林和作の没後50周年の年で、これまでの「和作旧居再起動計画」は集大成の段階を迎える。活用方針を決定し、自立して存続できる形を完成させる。以降も「和作ウィーク」を再生された小林和作旧居と旧小野産婦人科、高橋家で連続開催し、尾道の知られざる文化的蓄積の発掘と発信を続ける。

「瀬戸際建築保全事業」には現状で、運営方法や情報収集に課題はあるものの、失われゆく建物を保全し、尾道旧市街界隈の文化的記憶の風化に抗い、次世代への継承をハード・ソフトの両輪で推進する。
5年先に向けては、尾道だけでなく岡山など近隣エリアの文化研究者とのネットワークを構築し、滞在制作などを通じて国際文化交流を活発化させ、新たな視点で尾道の文化を作り上げ、発信していく拠点とする。このようにエリアが文化拠点として活性化していくことで新たな移住者を増やし、街並みの保全につなげていく。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 塩屋布団太鼓高欄掛けの復元新調事業 | | | | |
| 団体名 | 塩屋青年会 | | | 実施期間 | 2023年1月7日 ～ 2023年10月12日 |
| 代表者名 | 岸部 克俊 | 活動地域（都道府県名） | 兵庫県 | 詳細エリア | 神戸市垂水区塩屋地区（旧塩屋村） |

今回の活動で製作した高欄掛が地元新聞で紹介されました。

今回の活動を通じて青年/村役/子どもと一体感を醸成した太鼓巡業を執り行えました。

今回の活動で復元新調した塩屋布団太鼓の高欄掛けです。

## 活動の目的

塩屋布団太鼓復活にあたり当時譲り受けた布団太鼓の衣装の一つである、高欄掛は製作されて数十年が経過、非常に傷んでおり使用できない状況であった。そこで他の地区から借用した高欄掛を長年使用していた。
しかし、他の地区から借用した高欄掛を未来永劫使用することは、塩屋布団太鼓を継承する人達（特に若い世代）の継承する意識付けや布団太鼓への愛着心が生まれない。
本来あるべき塩屋布団太鼓の高欄掛を製作して、若い世代達の継承意識、布団太鼓への愛着心向上を図る。

## 活動の経過

1.図柄の選定
　昭和30年代に廃絶となった先代の布団太鼓に使用していた高欄掛の図柄調査を実施するところから開始した。
　村の年長者への聞き込みや、当時の写真を元に調査を実施したところSNSを通じて、
　当時使用していた高欄掛けが兵庫県小野市で発見された。
　発見された図柄が、源平合戦で有名な壇ノ浦の戦いであることから、
　郷土の歴史でもある一の谷の戦いと組み合わせた新たな図柄を採用することになった。
2.資金調達
　村（財産区/協議会）からの出資にあたり布団太鼓/獅子舞以外に村が管理を
　行っている神社や源平塚（源平合戦供養塔）の継承活動に青年会も参加する取り決めを行った。
　また地元企業/地域の団体/個人への支援の説明会を実施。
3.広報活動
　ご支援いただいた方や地域の方へのお披露目の実施、地元新聞（神戸新聞）取材により新聞に掲載。
4.衣装の保管
　高欄掛保管用の木箱を製作、保管のやり方や取扱い方のルールを確立。

## 活動の成果

高欄掛復元新調による成果
◎目標以上　〇目標達成、△目標以下
1.青年会の視点として、
　①若い世代が高欄掛を含めて布団太鼓を継承していく意識付け/愛着心が向上した→〇
　②青年会が村の活動に参加する機会が増えたことで、青年村役と一体感を醸成した太鼓巡業を行うことができた→◎
　　現状の布団太鼓に対する満足度：22年度50%→23年度90%
　　※青年会若手のコメント：多くの皆様のご支援により製作できた高欄掛を地域の宝として大切に継承していきたい
2.地域の視点として、
　①企業/団体/個人を巻き込み活動の趣旨を多くの方に知ってもうらことができ、
　　資金の支援だけでなく、祭り当日に担ぎ手の応援として参加が増加→〇
3.子どもの視点として、
　①23年度は地元小学校の150周年式典で獅子舞公演を実施すると共に布団太鼓の活動を広報することができ
　　秋祭りには、乗り子/子ども巡行の参加が増加→〇
　　乗り子参加数：22年度15人→23年度24人(60%増)

子ども巡行参加数：22年度約200人→23年度約270人(約35%増)

## 活動の課題

課題
1.青年会員数の底上げ(特に20代前半)
　将来の青年会の運営を担う人材の確保
　23年度の目標未達→青年会会員数30人に対して23年度45人(50%増)△
2.布団太鼓継承には修繕/新調が必須であり多額の費用が恒久的に掛ることから
　布団太鼓保存会設立に向けて村/地域団体/神戸市と引き続き協議して進める
　中期目標として引き続き実施

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | いにしによる：塩江の生きたアーカイヴを体験できる宿泊施設事業 | | | | |
| 団体名 | 一般社団法人トピカ | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 | |
| 代表者名 | 村山 淳 | 活動地域（都道府県名） | 香川県 | 詳細エリア | 高松市　塩江町 |

藤川邸に眠っていた古材を再利用したキッチン

高松市街地での成果報告会の様子

プロジェクトに関して出版された学術書

## 活動の目的

本プロジェクトは2020年より続いている塩江町の民家「藤川邸」に保存されていた民俗史料や生活用品の悉皆調査を行い、それらを利用した歴史資料館をゲストハウスと一体化した形で運用する取り組みである。これにより、塩江の歴史の中であまり顧みられず、語られてこなかった社会史的側面を再発見できる施設を作ると同時に、経済的理由などで継承が困難になりつつある民俗学的資料の保存を自走しながら行う方法を作り出すことが大きな目的である。

本年度では、藤川邸で発見された栗の木などの古材を使ったキッチンの作成、生活用品の再利用や展示など、家に眠っていたアーカイヴをモノの来歴や状態に合わせた形で活用することでアーカイヴを体験するための試行錯誤を行った。

また、同時並行で学術書『アートと人類学の共創』（天理大学出版助成金）を出版することで、共時的、通時的なアーカイヴを残す作業も行うとともに、書籍化することで塩江町の中での生活史のプレゼンスを向上させることを企図した。

## 活動の経過

当初申請時にはなかったものの、2023年4月時点で書籍化の話が立ち上がり、執筆や追加取材を行ったため計画を多少変更することとなったが、大まかには計画通り行った。

古材を使ったキッチン制作では、尾道市在住の大工の優れた技術により複数の材を継いで1枚物の材に見えるような天板を作成し、それを中心に据えたデザインや配色を行なって、土壁の再利用などを行い、ゲストハウスの運用に耐えうる実用的なキッチン作成を進めた。

アーカイヴの目玉となるダム底のジオラマ作成は、聞き取り調査を順次行うと同時にジオラマの土台となる部分の作成や下書き、試作を行った。

2022年度に展覧会で活用したアーカイヴの帰属作業は、食器類など活用可能なものから順次進めると同時に、戦時下資料などの貴重な物に関しては展示・保管方法の検討を行った。

成果報告会は当初は町内での開催を予定していたが、書籍化にあわせて本年度は高松市街地で市内の歴史や民俗学などに興味のある方を対象にお声かけをして行うこととし、1月に実施した。

また、2024年3月に簡易宿所の営業許可を取得し、モニター宿泊を行うことでゲストハウスとしての運用も開始された。

## 活動の成果

まず、上述の通り、学術書や施設などの成果物が段々と出揃ってきたことで、町内外の関心がより強くなってきた。特に高松市内や徳島からの見学希望の問い合わせを複数いただき、施設の案内を行った。このようにご来訪いただいた方の多くが、「いにしによる」のアーカイヴの方法をご覧になる中で、ご自身の実家などの来歴を気にし始めるような発言をすることも何度かあり、地域の生活史をそれぞれの地域で保存するような活動の種を蒔く施設になりつつあるのは大きな変化であるといえる。

また、町民の中では「いにしによる」をご覧になったり、私たちが聞き取り調査を行う過程で蔵に眠っていた写真や道具などを掘り出して回想したり、自分たちの地域の来歴を再発見する方々も散見された。また、藤川邸の所有者である藤川氏に至っては、ご自身の両親の来歴を確認するために満州から引き上げ時に上陸した舞鶴の資料館に出向くなど、地域史から国政史へのつながりを自身で見つけてくださった。

まだ量的には微々たる変化ではあるものの、質的には本プロジェクトに深く関わっている方ほど地域史への向き合い方が大きく変化している。これは大きな成果であると考えている。

また、ゲストハウス運用が可能となったことで資金的な自走に向けた道を開くことができたことも成果である。

## 活動の課題

　上述の通り、プロジェクトの深さに関しては段々と眼に見える成果が生まれてきたと感じているが、横の広がりはまだ十分であるとは言い難い。今後は、「いにしによる」を活用した地域の方向けの食事会などを開催することで、施設に気軽に立ち寄ってもらいながらその面白さを実感してもらうなどの工夫が必要である。
　また、2F部分は運用が開始されたものの、まだ1F部分のジオラマなどの制作と膨大なアーカイヴの帰属作業が残っている。これら作業を着実に進めることも今後の課題である。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 神社を拠点とした温故知新の精神と共に集い・育む地域コミュニティーきずな構築プロジェクト | | | | |
| 団体名 | 小豆島夏詣運営委員会 | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年8月31日 | |
| 代表者名 | 大和 美祈 | 活動地域（都道府県名） | 香川県 | 詳細エリア | 香川県小豆島町・土庄町（豊島） |

内海八幡神社あんどんまつり

富丘八幡神社あんどんまつり

内海八幡神社小豆島雅楽会奉納演奏

## 活動の目的

「夏詣」という新しい日本の風習を取り入れ、老若男女の島民が神社に訪れる機会を創出する。伝統を継承するため子ども達がふるさとを想う気持ちを高めることを目的に、地域資源（産業、文化、風習等）を表現する機会を提供し、将来子ども達が成人した後も定住者だけが島の未来を支えるのではなく関係人口として地域と関わりを持つ仕組みづくりを構築する。又神事等の伝統行事は適切に取り扱えば観光資源となるにも関わらず、観光資源としての活用観点が不足している為、元々ある空間に付加価値を付けることで神社の価値を更に高めいずれは神社の魅力を島外（海外含め）にPRし島外者に向けた商材を構築し単発的なイベントでなく観光経済にも貢献することに繋げる。我々の活動が元々地元に根付く地域資源を磨き上げ持続可能な島内・島外の関係人口のコミュニティを強化するきっかけづくりになることを目指す。

## 活動の経過

2021年度手始めに夏詣の提灯とのぼりを掲げ限定ご朱印の頒布等、参拝者が少ない夏の時期に神社を詣でる試みを実施した。2022年度は茅の輪づくりや小学生が制作したSDGsあんどん（牛乳パックを活用）を境内に飾る小豆島あんどんまつりを実施。あんどんには小豆島にまつわる地域資源（産業、文化、風習等）やメッセージが描かれており子ども達にとってもふるさと愛を育む機会提供が出来た。参拝者も老若男女に渡り結果一定の手応えを得られた為、2023年度には伝統文化の継承や賑わいづくりを目的として雅楽や地元のミュージシャンの奉納演奏を行いコロナ禍以前のような賑わいが取り戻せた。

## 活動の成果

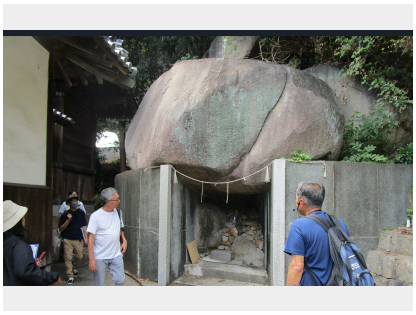
【あんどんづくり体験】
小豆地区6校の小学生が小豆島や豊島にまつわる絵やメッセージを牛乳パックで作られたあんどんに描き、神社の境内に装飾した。あんどんづくりはSDGsの学びを目的としており、SDGs4,11,17のゴール達成に向けて子ども達が考えながら行動に移すことが出来た。約700個のあんどんが集まり、オリーブ・醤油・素麺・佃煮などの地場産品、フェリーやロープウェイ等の島ならでは乗り物や観光地、又「きれいなところなのであそびにきてください」「きれいな海を守ろう」などのメッセージも見られ持続可能な町づくりの学びにも繋がった。
【あんどんまつり】
雅楽の奉納演奏、地元のアコースティックバンドによる奉納演奏、屋台などコロナ禍では実施出来なかった行事を行うことで境内も賑わい、多くの参拝者が神社を訪れた。新聞折り込みや広報誌折り込み等、ポスターやチラシを乗り物、スーパー、観光施設等に配布。あんどんまつりは2社にて合計4日間開催。イベントには約1050名の人が神社を訪れた。
【小豆島夏詣参画神社巡り】
夏詣限定御朱印頒布。地図入りのチラシを制作し各社を繋ぎ参拝者を促す。また島内の交通機関でもあるオリーブバスやシェアサイクリングの活用促進を行うことで御朱印巡りが各地域を結ぶきっかけづくりとなった。小豆島夏詣参画神社巡りは7社にて合計62日間開催、100体以上の御朱印が頒布された。
【7社での夏詣】
夏詣オリジナルうちわの配布、茅の輪くぐり、七夕飾り、提灯やのぼり等を境内に装飾。ポスターやチラシを乗り物、スーパー、観光施設等に配布。

## 活動の課題

広域に渡る複数箇所での取り組みとなる為、人手が必要となる。氏子総代や青年団等も人数が限られているため今後は地域、世代を超えた助けが必要となる。合わせて地域住民による演奏や踊り、イベントにまつわる作品展示等も取り入れることで、プロジェクト当事者を増やしたい。あんどんまつりの経験で子どもが主役となる機会を提供することが事業の持続可能性を高め、多岐に渡り影響を促せることを実感した。円滑な事業にするために、地元住民をはじめ、次年度は、夏詣の発祥地でもある浅草の関係者にも協力を仰ぎながら、島外の仲間づくりにも力を入れていきたい。また島の人口減少と共にお祭などに関わる人手も不足することが予想されるため、神社を通した幅広いコミュニティーを構築することで関係人口創出を促進するきっかけを作る。合わせて事業資金に関して、本事業の価値を高め島外企業にもアプローチし、関わる人の幅を広めつつ、事業を継続する仕組みを作る。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 地域のつながりを再発見する「ジオクルーズ」の開発 | | | | |
| 団体名 | 讃岐ジオパーク構想推進準備委員会 | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 | |
| 代表者名 | 長谷川 修一 | 活動地域（都道府県名） | 香川県 | 詳細エリア | 香川県全域 |

黒浜（岩黒島）：風化した岩でできた粘土は島で使われた



キイキ石（櫃石島）：花こう岩がだんだん大きくなる伝説の理由を語る郷土史研究家 濱本敏広氏

祇園神社（下津井）：下津井のかつての賑わいを語る下津井まちあるきガイド

## 活動の目的

かつての下津井港から坂出港の島めぐりの航路は瀬戸大橋の完成に伴い廃止され、途中の島だけでなく下津井と坂出も衰退してしまった。そこで、今回、かつての定期航路でジオクルーズを行い、下津井の街並み、坂出港～坂出商店街～JR坂出駅を歩き、航路の果たした役割を考えた。また、集合しやすい与島を基点としたジオクルーズも行い、交流を促進するための可能性について考えた。

## 活動の経過

4月 7日 島しょ部下見（琴さんバス利用）
4月 14日 下津井下見
9月27日 モニタークルーズ（与島～島しょ部～下津井～与島）
9月28日 モニタークルーズ（下津井～島しょ部～坂出港～JR坂出駅）

## 活動の成果

下津井港から坂出港の定期航路をたどりながら、島内で大地の成り立ちと歴史・産業を物語としたジオツアーを行い、地域の文化や資源を活かし、地元住民の交流を促進したジオツアーを構築した。また、下津井のガイド、弁当手配、船の紹介などを下津井sea village、島のガイドを坂出島しょ部郷土史研究家 濱本敏広氏、坂出のガイドを坂出の街を楽しむ会、坂出港町商店街復興組合、意見交換会を岩黒島婦人部と連携することで、ジオクルーズに深みが増した。

## 活動の課題

今後、下津井港から坂出港の島を繋ぐジオクルーズは、地域を元気にする起爆剤になる可能性もあり、次の活動につなげていきたい。アンケートでは「１つの島でもう少しゆっくりしたかった」「歩く距離が長くて疲れた」「地元の食材を使った食事が必要」等の意見があったことから、ジオクルーズを商品化する際は、ルートの構築を再検討する必要がある。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 再生空き家の快適性向上と外部人材・機関との連携を通じた地域づくり | | | | |
| 団体名 | くにとうの御船を守る会 | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 | |
| 代表者名 | 笠原 宏之 | 活動地域（都道府県名） | 岡山県 | 詳細エリア | 浅口市寄島町 |

里山・耕作放棄地整備活動前の集合写真

耕作放棄地での体験農園作業

ボランティア参加者とのグループワーク状況

## 活動の目的

地域固有の景観・町並み等の環境資源を生かしながらの、空き家対策並びに耕作放棄地の解決に繋がる活動の実践・継続。それらの活動を通じた地域の文化、並びに住民同士が支え合う繋がりの保全を目的として活動しています。

## 活動の経過

2015年4月　防災マップ作りの過程で地域の空き家増を確認。空き家調査実施。
2017年3月　空き家活用＋地域活性化の取り組みをスタートさせる。
2018年3月　空き家活用まちづくりプロジェクト始動。空き家でのイベント実施。
2019年3月　地域ぐるみでの空き家の利活用を拡大した。
2020年3月　国頭地区「お家探しプロジェクト」始動。空き家カルテ作成。
2021年3月　空き家対策を推進するため、担当行政との協働活動開始。里山整備開始。
2022年3月　空き家を集いの場として整備(月１回朝市開催)。お試し住宅運営開始。
里山整備の一環としてウォーキング・トレッキングコース整備開始。
耕作放棄地のアジサイ園整備及び体験農園活用開始。地区の空き家への移住・定住相談開始。
2023年3月～　集いの場の室内環境整備。お試し住宅運営継続。里山整備及び耕作放棄地活用の継続。地区の空き家への移住・定住相談活動の継続。

## 活動の成果

〇住民集いの場「ちょっと寄ってえ家」の快適性向上については、夏場の暑さ対策としてスポットクーラーを使って、どの程度の効果があるかを検証。結果として打合せエリアにおいて、十分な冷房効果を得ることが出来、空き家相談を受ける際に暑さを気にしなくて良かった。
また、地域住民が集う機会創出と我々団体の活動資金に寄与目的で実施している、月１回の朝市でも、夏場開催時にスポットクーラーの効果を確認出来た。
来年度以降の夏場の暑さ対策について、空調設備の必要性を会員全員で実感出来た。
・ちょっと寄ってえ家での空き家の相談件数実績は、１０件。
・空き家への移住件数は、賃貸含め我々の会経由で移住された世帯は、４件。
・ちょっと寄ってえ家での交流人数については、朝市のお客・トレッキング実施者・アジサイ園来訪者・地区の会合・学校関係との協働活動・卓球場利用者等で月平均１００人は下らないため、年間１２００人程度。
〇耕作放棄地再生については、アジサイ園整備を継続して実施。２０２３年６月～７月の２か月間だけですが、市内外から多数の見学者来訪があり、案内看板を急遽作成して設置した。
　また、イノシシが出没するためイノシシ対策として侵入防止用メッシュをアジサイ園及び体験農園に設置。アジサイ園内では効果がありイノシシ被害はなかったが、農園側のサツマイモ畑・里芋畑は残念ながら7月に被害にあい、侵入防止用メッシュの支柱を追加設置した。その後再度植え付けを行い、12月初めに実施した小学2年生対象の芋ほり体験授業では無事収穫出来た。
〇農作業体験、地域の課題解決の取り組みを学ぶボランティア交流会の実施については、大学生を対象として５月から募集活動を実施したのですが、まだコロナの影響がありなかなか応募者がいなくて、秋以降はNPO法人モコアに募集対応の助勢をお願いした。そして大学生だけでなく地元の高校生にも募集をかけた結果、１月と３月に農作業体験と交流会をすることが出来た。交流会では大学生と高校生だけでなく若い世帯のご夫婦や、地域学校協働活動中の中学生・小学生も参加して、グループワークを行い各グループで発表した。

今後も継続的な活動に繋がるようにしたいと思っています。
農作業体験へのボランティア参加者は、6人。交流会へのボランティア参加者は、地域学校協働活動の小中学生6名を加え16人。

## 活動の課題

「ちょっと寄ってえ家」の環境整備が整い、日常的な集いの場としての利用やイベント開催の場としての利用は、定着しつつある。しかし常時会員が当番で常駐する体制までには至っていないため、会員が不在時に利用された方との交流機会を逃している可能性がある。会員の皆さんで分担して誰かがいる管理体制にすることが課題と考えている。
また、現在地区の任意団体として活動しているが、現在のままでの活動で良いのか法人化取得にした方が、更なる飛躍が図れるのかについても、検討課題としている。更に、新型コロナ対応で保留していた地元中学生吹奏楽部の生演奏を、朝市開催時に地域の方々に聴いていただく機会を復活させるべく、現在中学校側と折衝中。多世代の交流機会を集いの場を使って増やすことが出来るよう、今後も試行錯誤しながら活動していければと思っている。

公益財団法人 福武財団

# 地域振興助成
# 2023年度自主・共催助成
# 成果報告書

Fukutake Foundation

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 大地の芸術祭事業（大地の芸術祭2023、冬プログラムSNOWART） | | | | |
| 団体名 | 大地の芸術祭実行委員会 | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 | |
| 代表者名 | 関口 芳史 | 活動地域（都道府県名） | 新潟県 | 詳細エリア | 越後妻有地域（十日町市・津南町） |

清津峡渓谷トンネル　Tunnel of Light

おにぎりのための運動会！

田中泯「雪の良寛」

## 活動の目的

過疎高齢化が進む越後妻有地域内において、地域に内在する価値を、現代アートを媒介して掘り起こし、その魅力を高め世界に発信し、地域再生の道筋を築くことを目的とする。

## 活動の内容

大地の芸術祭通年プログラムである「2023年の越後妻有」を2023年４月29日（土）～11月５日（日）に実施し、越後妻有地域を舞台に200点以上の常設作品、10以上の企画展、20以上のイベントを行った。また冬プログラムとして「『大地の芸術祭』の里 越後妻有2023冬 SNOWART」を2023年１月14日（土）～2024年３月12日（日）に実施し、各種企画展や雪上アクティビティを開催し、その他オフィシャルツアー等も行った。各プログラムによる通年誘客の取り組みを行った。

## 参加作家、参加人数

【参加作家】
イリヤ＆エミリア・カバコフ、目、名和晃平、森山大道、中谷ミチコ、レアンドロ・エルリッヒ、ニコラ・ダロ、ほか
【入込客数】
359,380人

## 他機関との連携

NPO越後妻有里山協働機構とは、各プログラムを連携して実施した。新潟県からは本事業の広報活動に関して側面的な支援を受けた。

## 活動の効果

通年プログラムの開催に伴い、「越後妻有里山現代美術館MonET」が人気を集めるなど、常設施設にも多くの方から来場いただき、相乗効果を得ることができた。また、第９回展の「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ2024」へ向けた準備も行う事ができた。
次年度の第９回展に向けて、当地域の魅力をさらに強く発信していく。また、アーティスト、サポーター、地域の方々との協働により、多くの方々から楽しんでいただける「大地の芸術祭」の準備を進めていく。

## 活動の独自性

「大地の芸術祭」は、2000年からアート作品、作品展示場所の自然、風景、食、地域住民との交流など、越後妻有の里すべて含めたものを「アート」として展開している。
来訪者はリピーターも多く、国、地域、世代ジャンルを越えた人々の交流と協働が新たな価値を見出し、過疎高齢化の進む地域に誇

りを取り戻すきっかけとなっている。

## 総括

通年プログラムを開催することで、季節ごとに移り変わる越後妻有の魅力を発信することができた。「大地の芸術祭」の里としてのブランド化と通年集客の促進を図ることで地域住民の活力の源や地域の活性化に大きく貢献している。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 事業名 | 豊島「食プロジェクト」推進事業 | | | | |
| 団体名 | 豊島「食プロジェクト」推進協議会 | | 実施期間 | 2023年4月1日 ～ 2024年3月31日 | |
| 代表者名 | 濵中 幸三 | 活動地域（都道府県名） | 香川県 | 詳細エリア | 小豆郡土庄町豊島唐櫃 |

稲刈り体験

刈り取った稲を天日干しするはざかけ（収穫祭稲刈り体験）

地元小学生による太鼓の演奏（収穫祭棚田のステージ）

## 活動の目的

豊島における棚田をはじめとする山の幸と瀬戸内の地魚である海の幸などを活用し、食とアートの活動を展開することにより豊島の振興を図ることを目的とする。地元の住民、観光客、豊島美術館が一体となったプログラムを開発し、地域振興のための複合的な活動を続ける。

## 活動の経過

2010年（平成22年）に第1回瀬戸内国際芸術祭が開催。同年に開館した豊島美術館の建設予定地が唐櫃に決定した時点で、香川県から美術館の予定地周辺の環境整備（具体的には棚田の復活）を県事業で行いたいので、地元に協力してほしいという依頼があったのが、活動の始まりである。
2009年：4月に発足。補助事業により、棚田の復元作業を行う。
2010年：瀬戸内国際芸術祭2010の開催と豊島美術館の開館に合わせ、周辺環境の整備と棚田の復元作業を行う。
2011年以降：復元した棚田での耕作・維持管理のほか、3年に1度開催される瀬戸内国際芸術祭への協力、また、豊島棚田の収穫祭や季節の野菜の収穫体験を開催し、観光客と地元の交流を通して、豊島の魅力の発信を続けている

## 活動の成果

復元した棚田での農作物の栽培と景観の維持管理が活動の中心である。
管理された棚田の風景は、隣接した豊島美術館、眼下の瀬戸内海と一体となった絶景であり、観光客だけでなく島民の心にも深く印象付けるものになっている。通常の維持管理のほか、年に3回は、地元住民、福武財団、町役場職員が協力して、用水路の清掃と周辺の草刈りを行い、豊島美術館を訪れた観光客が、いつでも棚田のあぜ道を歩き、昔ながらの農村風景を堪能できる環境を提供している。非常に労力が必要な活動であるが、単なる田畑としての役割だけではなく、豊島の観光資源として価値を信じて、今後も維持管理を続けたい。
これまでの棚田保全活動が認められ、農林水産省「つなぐ棚田遺産」に認定、香川県「さぬき棚田アワード」に選定された。
棚田でのイベントの開催については、田植え体験、さつまいも収穫体験、みかん狩り、収穫祭（稲刈り体験など）のイベントを開催した。収穫祭では、稲刈り体験等の収穫体験のほかに、キッチンカー等によるマーケットも開催し、島内外からたくさんの来場者があった。

## 活動の課題

福武財団の助成金や土庄町の補助金に頼った運営になっており、安定的な活動の持続へ向けて自主財源の確保が課題である。
また、発足から10年以上が経過し、当初関わってきた者も、年齢を重ね、高齢化していることから、新たな人材の確保も急務であると考えている。現在は、地域おこし協力隊制度を活用し、人材の確保に努めている。